平成23年度
第22回 大好きいばらき作文コンクール
入 賞 作 品

茨城県知事賞	（4名）
茨城県議会議長賞	（4名）
茨城県教育委員会教育長賞	（4名）
茨城新聞社長賞	（4名）
大好き いばらき 県民会議 理事長賞 小学校低学年の部 小学校高学年の部 中学生の部 高等学校の部	（41名）

茨城県知事賞

私がこの夏休みに気付いた事

潮来市立津知小学校　三年　川染智景

私は、夏休みに大切な事に気付きました。それは、三月十一日に起きた地震からみんなが一生けんめいにがんばっているということです。私は、去年の夏休みにも潮音寺のまんとうえんに行きました。ろうそくに火もつけました。鐘もつきました。でも今年のまんとうえんは、鐘がつけませんでした。潮音寺のある日の出は潮来市の中でも大きなひがいをうけた所で、お寺もすっかりかわってしまっていました。三月十一日からもう少しで半年がたちますがまだ道路はカンペキに直っていないしかべはくずれたままでざんねんです。

私は、小さい時よく潮音寺のこいにエサをあげに行っていたので、今はこいにエサをあげられなくてとてもさみしいです。

去年見たロウソクの光と今年のロウソクの光は、ちがう光のように見えました。ロウソクの光を見て「願いの光」だと思いました。私はロウソクに「家族が健康でありますように。」と書きました。私の宝物は家族です。家族が大切なのでロウソクに書きました。たくさんのきれいなロウソクの光には希望がこめられていて、がんばろうという意味があると分かった気がします。私は、人間に生まれてみんなが努力していることがとてもうれしく思いました。

去年は「平和」の文字がロウソクで作られていましたが、今年私が見たのは「絆」の文字でした。この文字にもみんなの希望がこめられているんだと知りました。今年の夏、私が感じた事はいつも、どんな時でも、ずっと努力を忘れないでがんばろうと思った事です。また、これから先みんなが困る事があったら私は、人のためになる事をしたいと思い今まで大切な事に気付かなくてとても残ねんだったと思いました。でも今後、人のためになる事をして家族みんなが喜ぶようにしたいです。また来年の夏休みにもロウソクのほのおにみんなの願いが神様に届くように、見に行きたいです。

ぼくと大子と夏休み

龍ケ崎市立龍ケ崎西小学校　五年　寺田浩亮

「夏休みにどこに行きたい？」と聞かれると、ぼくは必ず、「大子に行きたい。」と答える。

いつから大子に行っているかはよく覚えていないが、アルバムを見るときれいな川で遊んでいるヨチヨチ歩きのぼくの写真があるので、一歳前後のころから行っていたのだろう。

大子というと、「袋田の滝」が有名だが、そこだけでなくぼくたち家族をとりこにする場所が三つある。

まず一つ目は八溝山の支流を利用した釣堀だ。どんなに暑い日もその釣堀は天然のクーラーのおかげで二十八度くらいにしかならない。川のせせらぎと美しい緑に囲まれてのニジ

マス釣り。八溝の川は底まで見えるほどとう明で、しかもヒンヤリと冷たい。その水で育った魚たちは本当に元気で、釣り上げるとこっちが負けそうになるくらいグイグイッと暴れまわる。小さいころは自分一人では釣り上げられなかったが、去年くらいからは自分一人で釣れるようになって楽しさも増えた。釣りたての魚を炭火で焼いてもらい、口にほおばると、口いっぱいに幸せが広がる。年に一度しか行かないが、この釣堀のおばさんたちが「今年も龍ケ崎からよく来てくれたね。」と温かく迎えてくれるのもとても嬉しい。

二つ目はやはり滝だ。「月待の滝」という竹林にある小さな滝。その滝のみりょくは滝の裏側に素足で入れることだ。滝の裏に入り目を閉じるとまるで違う世界にいるような不思議な感覚になる。

「水の周りにはマイナスイオンがいっぱいだから空気をたくさん吸うといいよ。」と母が言うので、ぼくは思い切り深呼吸をする。すると気持ちがスカッとして気持ちがシャキッとするのだ。

そして三つ目は「森林の出湯」という露天風呂だ。父は全国の温泉にかなり詳しいし、母は箱根や伊豆の近くで育ったため温泉にはうるさいが、ここの温泉はそんな両親の大のお気に入りでもあり、ぼくにとってもここの露天風呂は日本一だ。豊富なお湯だけでなく、遠くに広がる山の景色。山から せり出す木を見ながらお湯につかっていると、その景色に吸い込まれそうな気分になる。秋に来たことはないが、紅葉の季節はもっともっとみりょく的な露天風呂になっていることであろう。

最近は都会も田舎も似たようなショッピングセンターが多くなってきた。でも大子には変わってほしくない。年に一度しか行けないけれど、行くたびに違う発見と感動がぼくを待っていてくれる。今のぼくには分からないみりょくがまだたくさんあるはずだ。

来年の夏、少し成長したぼくをまた見せに大子に行きたいと思う。

千波湖の四季

水戸市立第四中学校　一年　小松咲雪

私は茨城で生まれ、茨城で育ちました。遠くに行って、茨城に帰ってくると、とてもほっとした気分になります。両親も必ず、「やっぱり茨城が一番いいね。」と言い笑顔になります。茨城には、私や両親をいやしてくれる風が流れているみたいです。

茨城には、私が好きな場所がたくさんあります。その中でも私が一番好きな場所は、千波湖です。千波湖はたくさんの人が走っています。私も、いろいろな季節の千波湖を走りました。

冬の千波湖は寒いです。雪も降ります。走る私を見ている母は毛布にくるまり、手袋をして、寒そうにしています。走る人も少なく、さびしい感じがします。

でも、元旦マラソンにはたくさんの人が集まります。専門的に陸上競技をしていそうな人、家族で楽しく走っている

人、会社や学校の仲間で走っているみたいな人。みんな元旦の朝から早起きをして、楽しそうに走っています。

春の千波湖は、桜がきれいに咲きます。そんな中を走っていると、私はとても幸せな気分になります。いつもは走る私を見ているだけの母も、千波湖の周りを歩き出します。歩く母は、一周してきた私に追いつかれ「咲雪は速くなったね。」と言い、笑顔になります。

近くの偕楽園では、梅の花が咲き、たくさんの観光客がやってきます。今年は震災の影響で梅祭りに来る人も少なく、残念でしたが、来年はきっといつも通りのにぎやかな梅祭りができると思います。偕楽園は水戸の名所です。偕楽園から見下ろす水戸の風景は、とても素敵です。

千波湖の周りを、黒鳥の親鳥と小さなひよこも歩き出します。ひよこはぺたぺたとかわいらしく歩きます。散歩をしている人たちも集まり、写真をとります。みんな笑顔になります。

夏の千波湖は緑であふれます。千波湖の噴水が涼しそうに見えます。母は暑くて車の中で待っています。父も私もたくさん汗をかきながら走ります。走っている時は、暑くて、苦しいですが、走り終えるといつも気持ちいい風が吹いてきます。子供たちがにぎやかに遊ぶ声、お母さんたちの笑う声、千波湖はたくさんの笑顔であふれています。

父は、木にとまる五匹の小さなミミズクを見たそうです。千波湖にミミズクがいるなんて驚きました。私も見たいと思い、時々木をのぞきますが、まだ姿をあらわしてくれません。

秋の千波湖は、たくさんの枯葉が落ち、ちょっとさびしい気分になります。でも涼しくなり、走るにはいい季節です。夏より身体が軽くなり、走るのが速くなった気分になります。夏よりたくさんの人が千波湖の周りを散歩し始めます。子供からお年寄りまで、みんな自分のペースで歩いたり、走ったりしています。

千波湖は、一周三キロメートルあります。そして百メートルごとに目印があり、走るにはいい目標になります。自己タイムも計りやすく、たくさんの人が走っているので、目標になる人を見つけることもできます。地面はやわらかく、足に負担がかかりにくくなっています。走るにはとてもおすすめの場所です。

私の大好きな千波湖で、みなさんも走ってみませんか。きっと、たくさんの発見ができると思いますよ。

あったけぇなぁ、茨城の人

県立水戸第三高等学校　二年　山崎（やまざき）　芽依（めい）

ガタガタガタ……。

教室が少しにぎやかになった。初めはみんな普通に椅子に座っていた。だけどおかしい。どんどん体が前後左右にぐわんぐわんと力強く揺すられていく。それは時計が一秒時間を刻むごとに、何倍にも何十倍にも威力を増していく。天井の電気は大きく揺れ、机の上の勉強道具は床に放り投げられ、もはや座ってなどいられない。先生の「机に隠れろー」とい

う声で、椅子から床にたたきつけられながら、それはもうみんな必死に机の下に隠れる。パニックで「キャー」と叫んだり、泣いている声も聞こえる。小中学校の時に何度も何度もやった、あの避難訓練を思いだした。まさか実際にあるなんて正直思っていなかった。頭を混乱させながらも、とにかく机の脚をぎゅっとつかむ。

少したって強い揺れが一回おさまった。それと同時に、体力テストの五十M走を走るよりもはるかに速いであろうスピードで、とにかく外へ走る。全校生徒が驚きを隠せないような顔で、未だ揺れている校舎を向いて並び、点呼をする。窓ガラスは割れ、市内にはサイレンが鳴り響く。私の周りでは、友達と抱き合う人や、顔をぐちゃぐちゃにさせながら、お母さんと電話をする人もいる。止めても止めても流れ出る汗と涙と、こみあげる不安を「大丈夫、大丈夫」と、友達が背中をさすりながら声をかけ続ける姿もある。交通機関も復旧のメドは全く立たないということで、体育館での避難になった。先生も、生徒も、寒い夜に備えて動き回り始めた。

日が落ちた頃には、停電と断水になっていた。頼りになる明かりは、数少ないストーブの火の明かりと懐中電灯、先生方が交代で照らし続けてくれた車のライトだけだった。少しすると体育館の半分は一般の人で埋まり、二百人を越える人々が体育館に避難した。

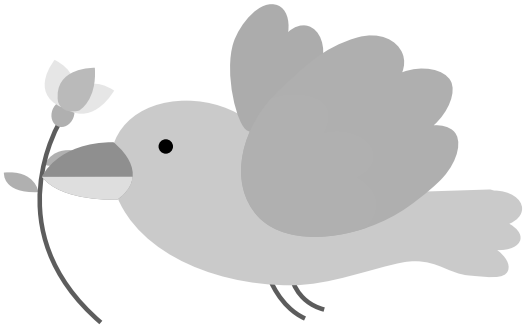
数時間して、友達のお父さんが迎えに来てくれた。私を含めた数人はその友達の家に泊めてもらう予定だったが「本当に今、帰って後悔しないのか？」と聞かれて思わずハッとした。問いかける目が何かを伝えようとしていた。それで私は、学校に残ることを決心した。スポーツをやっていて、体力には自信があったが、それ以上に私にも何か出来ることはあるはずだと思った。そして今までに「芽依ちゃんの笑顔を見ると、元気が出るよ」と言ってくれた人が何人もいたことを思い出した。

そして私はとにかく走り回った。マットを渡したり、道案内をしたりするたびに、かけてもらった「ありがとう」の言葉が、いつも以上に温かくて、いつも以上に心に響いた。そうしていると夜中になり、一人に一袋ずつ乾パンが届けられた。みんなニコニコしながら乾パンをかじる。噛めば噛むほど、おいしさが口いっぱいに広がって、サクサクッという音は、冷えていた心と体を一瞬にしてほぐしたのだ。私自身、あんなにもビスケットをおいしいと思ったのは初めてだった。

次の日、市内の状況を見てこようと思い、友達と校外に出た。道路は亀裂が入り、電柱は倒れかけ、街灯は根こそぎ道路に横たわっていた。全く昨日までに見てきた風景とは違う、変わり果てた姿だった。

学校に戻っている途中、ある料亭の前を通った。一人のおじさんが炭で火をおこして、暖をとれる様に作業していた。「あったまってけ」と声をかけてもらったので、私たちは冷たく冷えた掌を、火の上にそーっと近づけた。一気に体の中がポカポカしてきて、自然と笑顔がこぼれた。そして「食パン焼いて食べてけな」と炭火で焼いた食パンに、温かいお茶までも出してもらった。たまたま通りかかった名前も知らない私たちは、すごく親切にしてもらい、人って温かいなと改め

てすごく実感した。
マグニチュード九・〇と、国内観測史上最大であった『東日本大震災。』地震に加えて津波や火災、原子力発電の爆発や放射能の影響。計画停電も行われ、ガソリンや食糧不足にもなった。
私は、毎日の「当たり前」の生活の中に、たくさんの「幸せ」があることを改めて実感した。スイッチを押せば付く電気、蛇口をひねれば出る水。「命」というものが、どれほど大切で、尊く、愛しいものなのかということもとても考えさせられた。多くの人の笑顔や涙が、私の心にしっかりと焼きついた。
決して忘れてはならない三月十一日。この地震が意味あるものだったと考えるなら、一人一人が自分を、相手をもっと大切にすること。命を大切に、今を全力で生きてゆくことが必要だと、私は思う。そして、人との繋がりや出逢いに今まで以上に感謝すること。
「今日も一人でも多くの人が、笑顔でありますように。」



茨城県議会議長賞

ゆめはあたらしいくすりを かんがえるひと

阿見町立本郷小学校　一年　山下　夏彩

わたしは、おとなになったらあたらしいくすりをかんがえるひとになりたいです。

どうしてなりたいかというと一つは、いとこの三さいのおとこのこがたまごとこむぎこがはいっているものをたべるとからだじゅうにかゆいぶつぶつがでるからです。ぴざ、けーき、びすけっと、いろいろなたべものにはいっているのでおばさんはこまっているようです。

わたしのおかあさんもあかちゃんのときひふがかゆくてないていたそうです。よるやあついなつは、ねむれなくておんぶしてあげていたとおばあちゃんがいっていました。

わたしのようにいろいろたべられるといいのになあとおもいました。

いとこのおとこのこが、なんでもおいしくたべられるようにあたらしい、いいくすりをつくってあげたいです。

わたしは、まいにちあさとよるくすりをのんでいます。三さいのときは、一にち三かいのんでいました。いまは、一にち二かいになりました。すくないほうがのむのをわすれないでらくです。いとこのおとこのこも一にちに一かいか、一しゅうかんに一かいだけのめばいいくすりをわたしがべんきょうをしてつくってあげたいです。

ほかにもこまっているひとがいるとおもいます。みんななんでもたべられるようになるといいとおもいます。

二つめは、七十さいのだいすきなおばあちゃんにげんきで、ながいきしてほしいからです。

おとなになったらくるまのうんてんをしておでかけのおてつだいをしたいです。それでひゃくさいよりも、もっとながいきしてほしいからです。いつまでもげんきがでるくすりをつくりたいです。

みんなのおうちのおじいさん、おばあさんもげんきでながいきできたらうれしいとおもいます。

それでわたしは、おとなになったらあたらしいくすりをかんがえるひとになりたいとおもいました。

ハマダンゴムシと私の夢

つくば市立竹園西小学校　六年　加藤　朱莉

ハマダンゴムシを知っていますか。海岸の砂浜に生息するダンゴムシの仲間です。よく見かけるオカダンゴムシより一回り大きく、夜行性で、体色は白、茶、赤と色とりどり、大きな目がかわいい在来種です。自然の豊かな海岸でしか生息できない種です。

ダンゴムシ類が大好きな私の夢は、生物学者になることで

す。茨城県内を中心に分布調査を行っていて、県内の二か所でハマダンゴムシの生息を確認しています。私は、この自然環境をいつまでも守りたいと考えています。

探し続けたハマダンゴムシを初めて見たのは、北茨城の海岸でした。情報を元に何回も海岸に通い、当てもなく砂浜を掘り続けました。やっと一匹だけ見つけた時の感動は忘れられません。

国内の砂浜では、環境破かいのために、ハマダンゴムシの生息地がどんどん減っています。茨城県も例外ではありません。ポイ捨てされたゴミ、片付けていないバーベキューの跡、犬のフンなど海岸はひどい状態です。また、重機を使った海岸清そうや四輪く動車の乗り入れなどで、生物の環境が変わり絶めつの危機にある生き物もいます。

森や林では、ダンゴムシ類などの土じょう動物が落ち葉を食べ、きん類がそのフンを分解して良い土を作ります。海岸でも同じで、海そうを食べた土じょう動物のフンが良い砂作りに役立ち、また、栄養分が海に戻って海そうが育つサイクルがあるのです。何でも食べる、海の掃除屋さんのハマダンゴムシは、私達人間の散らかしたゴミまでも、せっせと食べて良い砂を作るために働きます。発泡スチロールまで食べるのはおどろきです。

三月十一日、東日本大震災による津波では、茨城県内の海岸も大きな被害を受けました。震災の二ヶ月後にやっと行く事ができた調査で、元気なハマダンゴムシ達に会えた時は、本当にうれしかったです。私は地震にも津波にも負けずに生き残ったハマダンゴムシに勇気をもらい、そして、この環境をいつまでも守ってあげたいと改めて感じました。

私に出来ることはないか考え、調査の時には、必ずゴミ袋一袋分のゴミを拾い持ち帰ることを始めました。一人では、小さな力でも協力すれば大きな力になります。私の研究を通して、一人でも多くの人にハマダンゴムシのこと、その働きを知ってもらい、その生息環境を守る手伝いができたらうれしいです。

茨城県の東側に広がる約百九十キロメートルにおよぶ海岸線をみんなで力を合わせて、ハマダンゴムシ達と一緒にいつまでも守り続けたいと思います。そして私の夢がかなった時茨城県の美しい海と生息する生物を世に紹介したいと思います。

茨城の未来へ向けて

守谷市立けやき台中学校　三年　髙橋（たかはし）　由莉子（ゆりこ）

関東地方で、大空を見上げ座っている犬の形をした県、日本一の利根川が流れる豊かな大地。太平洋に面する長い海岸線・広い平野にぴょこんと筑波山・日本で二番目に大きい湖の霞ヶ浦。名前の由来は、おとぎ話のように茨で囲まれた城があったから。江戸時代には、水陸交通の要所として、地方における政治・経済・文化の中心として栄え、国民のほとんどが知っている水戸黄門は、今は県のゆるキャラ『ハッスル黄門』として諸国漫遊しています。自然と田畑と世界に誇れる科学技術研究施設を持つ茨城県南で、私は生まれ育ちま

した。

三月の東日本大震災・原発事故では、茨城県も大きな被害を受け、私なりに色々と考えさせられました。そこで、これからの茨城県が、日本の中でどのような役割ができるか、家族と出し合ったアイデアを交えながら書きたいと思います。

震災の時、大きな揺れに驚きましたが、それ程慌てないで行動できました。小学生の時、地区子供会で東京の防災館で、震度五強の揺れと暴風雨体験、火災時の煙体験・消火訓練をした事があったからだと思います。この様な体験学習を学校行事の中に取り入れていくことで、防災意識も高まるのではないでしょうか。私の地域では、子供会や生徒会活動で『ご近所の底力・あいさつ運動』もしています。人と人とのつながりを深めたり、防犯にもつながるからです。震災の日、家に帰ると外で近所の人が集まってラジオを囲んでいました。停電でテレビも電話も使えなく、情報手段がなかったからです。お向かいの家は、屋根が壊れていましたが、余震が続く中、裏の家の方がブルーシートをかけてあげていました。大きい被害を受けた家なのに、お向かいの方は電池の買い置きのなかった我が家に電池を分けて下さいました。私は、ご近所つき合いの大切さ、助け合いの心を強く感じました。

この夏、生徒会で募金活動や市内中学生徒役員で『薬物乱用防止運動』に参加しました。「持ち合わせがなくて、少しだけど……」と申し訳なさそうに募金箱に五百円玉を入れて下さった方、たくさんの方の協力で小さな活動でも大きな力を生み出すことも学びました。

協力して支え合うこと。茨城県は、農・水産物で首都圏の食卓を支えています。あらゆる産業技術を発展させる頭脳と科学技術施設があります。広い土地、休耕田畑（でんぱた）、豊富な水資源もあります。今、日本の食糧自給率は、三十九％しかありません。そこで、従来の農業を守りながら、別に、天候や放射能に左右されず、野菜や米を安定し供給できる水耕栽培工場を作り、日本の食糧を支えることもできるのではないでしょうか？　また、そこから新しい工業・科学技術も発展していくことになり長期的視野で、経済的にも豊かな県になるのではないかと思っています。

原発事故では、私の地域もホットスポットになり、体育祭が短縮されたり、転校する友達もでて悲しい思いもしています。原発にエネルギーを頼ってきた日本は、節電で大変な思いもしています。原発に対して、私は否定も肯定もしません。県歌の三番には『世紀をひらく原子の火～この新しい光をかかげみんなで進む足なみが、明日の文化を築くのだ』とあります。この歌詞が消えることがないように願っています。

茨城県の県章は、豊かな自然や輝かしい未来を表現する青色で描かれた、バラのつぼみで創造性・先進性・発展・躍動を表現しています。震災などでダメージを受け、これから復興していく日本の姿をそのまま表している様に思います。

バラのつぼみはいつの日か必ず開きます。私は、それを支える一人の県民として頑張りたいです。

震災の教訓を未来の茨城へ

県立茨城東高等学校　一年　塙（はなわ）　直（なお）樹（き）

三月十一日、この日、日本は東日本大震災という未曾有の大惨事に見舞われました。大きな津波が襲来し、特に岩手、宮城、福島の三県は被害が甚大で、町は壊滅的な被害を受けました。ここ茨城でも被害が大きく、僕自身にとっても初めての経験でした。母と弟妹を迎えに行く途中で、初めは何が起こっているか分からず、周囲の建物が大きく揺れだし、いつもとは違う激しい地震だと感じました。

その日、僕は中学校を卒業してまだ二日しかたっておらず、四月からの新しい生活に期待で胸を膨らませていました。しかし、震災が一瞬にして、僕の「期待」を「不安」へと変えてしまいました。テレビでは津波や原発のニュースが次々と流れ、自分もライフラインが途絶えた中での生活となり、四月からの高校生活は大丈夫なのだろうかと、不安にかられました。また、震災からの数日間、僕は水を給水所までもらいに行ったり、弟妹の面倒をみたりしながら必死に過ごしていました。

自分の生活が以前と全く違う中、僕はこれからの将来について考えていました。以前から僕の将来の夢は、幼稚園の先生になることでした。こんな状況になっても、それは全く揺るぎませんでした。むしろ、今、自分が経験し、感じたこと、考えたことを、こども達に伝えたい、いや伝えなくてはならないと深く考えたのです。今回の地震で茨城も津波や鉄道、多くの建物などで、甚大な被害を受け、僕の住む町も含め、県内の多くの場所でライフラインが途絶えました。今までにない経験をして、僕自身も脅えていましたが、幼いこども達はもっと怖い思いをしたのではないかと感じました。実際に、僕の弟妹たちは、小学校に迎えに行って、僕と再会した際、不安で泣いていました。そんな弟たちを見て、少しでも安心させてあげたいと、明るく振る舞っている自分がいました。

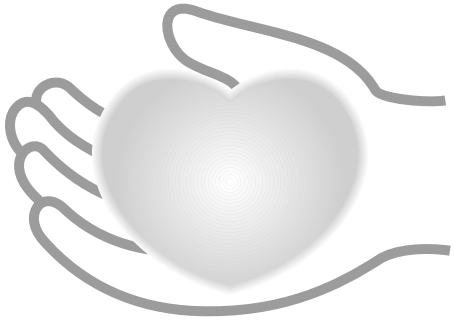
僕が、この震災の体験をこども達に伝えることで、また、その先の未来の人達にも伝わっていって欲しいと考えます。それは、もしまた同じような地震が発生した際に、よりよく対処し、減災できるようにするためです。今回の地震はマグニチュード九と、観測史上最大のものとなりました。しかし、歴史を遡ると、八六九年に起きた貞観地震（マグニチュード八・三～八・六、死者約一〇〇〇人）や一六一一年の慶長三陸沖地震（マグニチュード八・一、死者二〇〇〇人以上）などの記録があり、今回の震災ではその教訓をいかせなかったことになります。地震や津波がまた長い時間を経て起こった際に、そのとき被害を受けた一人一人が、次の世代に伝えることで、今回よりも、迅速な対応ができたり、津波で命を失う被害も最小限にくいとめられると思います。

また、どれだけ被害が大きくても月日が流れるにつれて、恐怖心は薄れていくものです。さらに、今生きている人間はいつか亡くなり、新しい人達の時代になっていきます。この先、生まれてきたこども達は、今回の地震の恐怖を体験することはできません。そして、いつかは震災未経験の人だけの

茨城になってしまいます。そこに今回のような地震が来ると、今回被災した人々と同じ恐怖に襲われると思います。しかし、せめて、前の世代から受け継いだ教訓を次の世代に伝えれば、いざという時に必ず役に立つはずです。十六年前の阪神淡路大震災での経験が今回の支援や復興に、大いに活かされていると聞きます。僕は多くの人と、未来に伝える必要があることを真剣に考えていきたいのです。

もう一つ、やりたいことは、復興支援です。震災で、日本三大名園の偕楽園や岡倉天心が建てた六角堂など、多くの建物や公共施設が被害を受けました。直すには、貴重な文化財や公共施設に対する理解や費用が必要となります。僕が所属するＪＲＣ部のボランティア活動は小さな存在かもしれません。しかし、そこから今の自分にできる復興支援を始め、故郷である茨城のために協力していきたいです。

震災で多くの人命が失われました。しかし、得たものもあります。それは、人と人との絆です。多くの人が避難所で過ごしました。その中で、皆が共に力を合わせて何日も過ごしていたと思います。食べ物を分け合ったり、共に支え合ったりと、苦しい状況の中でもみんなが未来を信じて過ごせたから、少しずつ復興してきているのだと思います。また、経験したからこそ、改めて電気や水の大切さを学び、何かを得た気がします。必ずしも、地震が全てを奪うだけでなく、何かを得るための試練だと、僕はとらえます。その得たものを、未来に活かさないと意味がありません。皆の経験を教訓にし、次の世代に伝え、つなげることが大切です。大好きな茨城の未来のために、伝えていきたいです。



茨城県教育委員会教育長賞

ぼくのゆめ

小美玉市立竹原小学校　二年　髙田勝太郎

ぼくのゆめは、パイロットになることです。それは、パイロットがかっこいいだけでなく、いろいろな国に行けるから、ぼくはパイロットになろうときめました。

そして、いばらきけんに空こうができて、大きなひこうきがとぶようになりました。ぼくはいつかあの大きなひこうきをそうじゅうしたいです。

でも、目がよくないとパイロットにはなれません。そして、えいごもおぼえないといけません。ぼくは、これをのりこえてこそ、パイロットになれると思います。

だから、テレビを見るときは、はなれて見るようにして、すこしずつえいごをおぼえることができるように、おとうさんにいろいろと、

「これをえいごでなんていうの。」

と聞いたりしています。おとうさんは、こたえられないことがたくさんあってざんねんです。

五さいのころ、こうくうさいで、ブルーインパルスの三ごうきのパイロットとあくしゅしたときぼくは、ぜったいパイロットになるときめました。そして、ぼくの手であの大きなひこうきをそうじゅうして空をとんでせかい中に行きたい。

日本には、九十八この空こうがあります。しかし、せかいにはかぞえきれないほどたくさんの空こうがあります。

いばらき空こうからたくさんのせかいの国ぐにとつながって、たくさんの外国の人たちをおみたましにつれてくることができればいいと思います。

ぼくもこれからたくさんべんきょうしてかっこいいパイロットになって、せかいのいろいろな国の人とお話ししたいです。

霞ヶ浦の未来・ぼくのゆめ

稲敷市立江戸崎小学校　四年　野口直純

あんなにきたない所でいかだに乗るのはいやだな。今年の夏休み、ぼくは、活動しているボーイスカウトのキャンプで、リサイクル容器を使っていかだを作り、霞ヶ浦で、うかべて乗るプログラムをやると聞いて思った。

社会の学習で、わたしたちが、毎日使っている水道の水は霞ヶ浦からくみあげ、きれいにして配水場に送られ各家庭へ送られている事を勉強したばかりだったけど、ぼくが知っている霞ヶ浦は、まわりはごみだらけで、水もきたなくてくさい。だからとても水の中に入っていかだで遊ぶ事なんて考えられなかった。祖父に、

「今から五十年ほど前は霞ヶ浦で泳いだり遊んだりしたんだよ。」

と言う話を聞いた。ぼくにはしんじられなかった。色々不安

はあったけど、とにかくいかだ作りにちょうせんしてみる事にした。
いかだは家庭で集めた牛にゅうパックやペットボトル、空きかんなどの材料で作る事になった。仲間と話しあってせっ計図作りから始めた。人が四人くらい乗れる大きないかだだ。どうにか、せっ計図通りに出来上がり、いよいよ霞ヶ浦へ持っていって乗る事になった。早くいかだに乗って遊びたいな……むねはドキドキワクワクした。実さいに霞ヶ浦に行ってみると、たくさんのゴミが落ちていた。つり具、ダンボール、大きな物はこわれて動かなくなった船。水もよごれていて、おまけに鼻をつまみたくなるようないやなにおいがした。ぼくが思っていた以上に水辺はきたなかった。それでもいかだは、ぶじに水にうかび仲間と交代で乗って遊ぶことができた。遊んで楽しかったけれどつり針やわれたびんが落ちていてあぶないからくつをはいたまま入った。はだしで入れなかったのはざんねんだった。
キャンプが終わってから、ぼくは、未来の霞ヶ浦の事を考えた。日本で二番目に大きな湖を五十年前のようにきれいな場所にもどす事はできないのかな。霞ヶ浦をきれいにするためにぼくたちに出来る事は何だろう。それは、自ぜんを大切にしごみを落とさない事や家庭では、きたない水を川などに流さないようにしなければならない事だと思う。前に母が、
「米のとぎじるなども流さないで庭の植木にかけるといいんだよ。」
と言っていた。一つ一つはすごく小さな事だけれど、地いきの人みんなで協力すれば少しずつ変えていく事ができると思う。いつか、昔のようなきれいな霞ヶ浦にもどったら、泳いだり、魚つりをしたりしたいな。そして、茨城に来たかん光客がたくさんとおとずれるような場所にしたい。そして、茨城の自まんできる場所にする。それがぼくのゆめだ。

一生茨城と共に

城里町立桂中学校　二年　神長憲悟

「うわっ放射能まみれの野菜だ。ガンの元だな。」
この言葉は、震災の後福島第一原子力発電所の事故で、茨城県産の野菜が風評被害によって売れなくなり、農家を支援しようと各地のスーパーで、農産物応援フェアをやっていた時に僕が耳にした言葉だ。
この時、テントで野菜を売っていた人は、この言葉を聞いた途端に下を向き、周りにいた人達も急に黙って、せっかくのフェアも一瞬にして重苦しい空気に変わってしまっていた。
このように今、福島だけに限らずこの茨城でも、原発事故による放射性物質の影響は深刻だ。ほうれんそうに始まり、パセリ、カキナ、お茶にコウナゴと次々と食べ物が出荷停止になったかと思えば、海開きしても海水浴に来る人がほとんどいない等、あらゆる場面で、放射性物質による被害をずっと受け続けている。
そして、放射線量が、事故前の通常の値よりやや高い状態が何ヶ月も続いているからだろう、僕の周りの人達も含め、

多くの人々が放射能による健康への影響をとても心配している。

そんな中、僕の将来の目標も、今まで体験した事もない未曾有の災害によって少しずつ変わってきている。

前まで僕は、医師不足で深刻な県北地域で内科医か、または水戸市の子ども病院で小児科医になる事だけを目標に、小学四年生の時からひたすら勉強に打ち込んで来た。

理由は、県北地域に住む祖父母が、近くの病院が閉院して困っていた事と、未熟児で生まれた同じ年のいとこの命を救った子ども病院の医師が、不足しているとの新聞記事を以前読んだからだ。

けれど今回の事故をきっかけに、今では放射線医学を学び、将来は被曝医療の専門医になろうかと考え始めている。

というのは、福島で事故後作業をしていた人が被曝した時、その人を見る被曝医療の専門医が福島県内に一人もいなかった為、広島と長崎の大学から研究に医師に来てもらっていたからだ。

茨城でも、震災後停止しているとはいえ東海第二発電所を抱えている。将来運転再開するかどうかは分からないけれど、そのリスクは考えないといけないと思う。

それと、福島ほど高い線量ではないにしても、茨城では北茨城市をはじめ、低い線量を事故後ずっと浴び続けている。新聞や雑誌、テレビ等では、これについて大丈夫だと言う専門家と、低線量を浴びた場合のデータが無い為、その影響は未知数だと言う専門家と二つに意見が分かれている。

また、福島の子供の尿から、セシウムが検出されたと言って騒いでいたけれど、放射性物質が暫定規制値を上回って検出されるまで、該当する食物を食べていた人は、自分がどれくらい内部被曝しているか実際とても気になるだろう。

だからこんな時、先頭に立って多くの人の不安を払拭したり、正しい情報を提供したりする人が絶対必要だと思う。僕が目指すのは、まさにこんな時、茨城の為に陣頭指揮が取れる医師になる事。

千葉県には放射線医学総合研究所があるけれど、今回の事故で福島の人達の不安を取り除く事に尽力したかと言えば、僕にはちょっと疑問が残る。

また、今でこそ放射線と言えば諸悪の根源のように思っている人も多いと思うが、医学の分野では、今までに多くの命を救って来たのも事実。きちんとそういった事も踏まえて、情報を発信していく人が茨城でも必要だろう。

だから僕は、将来茨城の人の命を守る為に、今自分は何をすべきかをいつも考えている。

私の選んだ道

県立佐和高等学校　二年　小林（こばやし）　ひかり

私は将来、看護師になるのが夢だ。いつからだろうか、いつのまにかそう考えていた。

高校の掲示板で、看護体験があるのを知り、私は申し込むことにした。予定は、三月二十五日だった。しかし、三月十一日、東日本大震災で我が家が被災し、看護体験に参加する

ことができなくなってしまった。そのことを伝えるため、体験先に電話したところ、少しだけ看護部長さんと話をすることができた。話の内容は、震災のことや、被災した病院の現状、今とても看護師が必要とされていることなどで、貴重な現場の声を教えていただいた。このお話を聞いて、私は強く心を揺さぶられた。できる事なら、今すぐ手伝いたいとさえ思った。話の最後に、「諦めずに看護師目指してね」と言われ、私は「はい！」と答えていた。この時が、本気で看護師を目指そうと決めた瞬間だった。震災で病院は大変という時に、私のために時間を割いてくださった看護部長さんに心から感謝したい。

病院は、災害時でも常に私たちの生活が、人々の命を支えていることを、実感できた。世の中は水がない、電気がないと騒いでいるのに、きちんと役割を果たしていた。

また、私の父は、一年程前から椎間板ヘルニアを患っている。そして、病状が悪化し入院することになった。父の入院中、病院へ行くことが多く、自然と看護の仕事を見る機会が増えた。看護師は、患者さんの体調管理だけでなく、患者さんとコミュニケーションをとり、心のケアもしていくことが大切だということが分かった。現に父も、一週間の入院ではあったが、様々な気づかいと温かな言葉に、とても楽しく生活できたと話していた。そのことを聞き、私は、患者さん一人ひとりにとって居心地の良い場所を作り、苦痛ではなく、安心を与えられる看護師を目指したいと気持ちを新たにした。

夏休み前に、地元の東海病院で看護体験が行われることを知り、迷わず申し込んだ。そこは、父が入院していた病院であった。また、私自身も足を怪我した時、お世話になった所だ。地域医療が見られるとても良い機会だった。

そして当日、初めて白衣に袖を通した時、とてもドキドキした。いつか本当にこの白衣が着たいと、気がひきしまる思いがした。着替えが済んだ後、体験は手洗いと消毒から始まった。感染症予防のためだ。小さなことでも、人の命に関わってくるから手を抜いてはいけない。

次に、手術室の見学だ。手術の時間を短くし、安全にすませるために、手術器具の改善をしているそうだ。他にも、治療がスムーズに行くように、医療器具や、病室の改善を心がけて、患者さんの安心・安全を考えた、心配りがされている。

この体験で、看護師の仕事は、病院内だけではないということを知った。福祉センターや老人ホーム、保健所、学校の保健室など、多くの場で看護師は必要とされている。他にも、訪問看護といって、患者さんの自宅へ行き看護するものもある。このように、選択肢は一つではないことも知ることができ、自分の視野をもっと広げることができた。やはり、ここでも、看護師が必要とされている現状を知り、地域で活躍できる人材になりたいと、強く感じる出来事だった。

私は来年には高校三年生になる。これから先、看護師になるために、進路を考えて行動に移さなければならない。そしてどうしても地元で活躍したいと考え、県内の大学のオープンキャンパスに足を運んだ。

なぜ茨城県内に進学したいかというと、一人の転校生の影響でもある。その転校生は、東日本大震災で被災し、福島県

から来た女の子だ。私は彼女とすぐに仲良くなり、前にいた高校のことや、今の生活など、私には想像もつかない体験を話してもらった。また、彼女は看護師になるのが夢だと話してくれた。ちょうど看護体験が近かったので、一緒に行くことにした。福島県では、看護体験というものがなかったので、とても良い経験ができたと喜んでいた。茨城県と福島県ではしくみが違うことを知ることができた。私は彼女に大学はどうするのと聞いたところ、やはり、地元の福島県の大学へ進学したいと話していた。九月の初め、彼女は福島県に帰っていった。仮設住宅の抽選がやっと当たったと喜んでいたのを覚えている。やはり、生まれ育った土地は、誰にとっても特別なものである。彼女にとって福島がそうであるように、私にとっては茨城が愛着のある特別な土地なのだ。離れた福島の地で、友人も頑張っている。お互いを励みにしながら、私はこの茨城県で自分の夢をかなえて、茨城の未来に貢献できればと考えている。

茨城新聞社長賞

大人になったわたし、み来のわたしの町

牛久市立向台小学校　三年　佐藤樹梨

わたしは大人になったら、けいさつかんになりたいと思っています。

けいさつかんになりたいと思ったのは、二年生からです。その理由は、悪い人をつかまえて、みんながえ顔で楽しくすごしてほしいと思ったからです。

いつもテレビを見ていて、悪いニュースやかなしいことがあるととてもいやな気持ちになります。

わたしが大きくなったとき、みんながえ顔で楽しくなかよくすごせて、悪いことがないようにしたいです。

そのために今のわたしにできることは、たくさん勉強してクラスのみんながどうやったら楽しくなかよくすごせるか考えたいと思います。

けいさつかんになるために、体育もがんばります。

理由は、足が速くなりたいからです。悪い人をつかまえるのには、足が速くないとだめだからです。今はそんなに速く走れないけれど、毎日少しずつ走って速くなりたいです。

わたしがけいさつかんになったとき、わたしがすんでいる町は公園や木やお花がいっぱいあるゴミのないきれいな町。子どもがたくさんいる町。そんな町がいいです。

そうするためには、緑を大切にして、電気や水の大切さをわすれずにゴミをすてないようにしたいです。

そのためには、ひとりひとりみんなのきょうりょくがひつようだと思いました。

みんながどりょくすれば、みらいのわたしの町は緑がたくさんあって、木やお花、公園の多い、ゴミのないきれいな町になっているはずです。

大人になったとき、この今の気持ちをわすれないようにします。

私の描いた将来の夢

水戸市立寿小学校　五年　髙橋優生

ぼくには、小さいころからの夢があります。それは、レスキュー隊になることです。最初は、体を動かすことが大好きだったからです。そして、ただただかっこよく見えてあこがれていました。

しかし、三月十一日に、東日本大震災が起こり、人を助けることの大切さと大変さを心から感じ、ぼくの夢は、なお深まりました。

震災の時、ぼくは学校にいました。最初は何がおこったのか全くわかりませんでした。みんなのさけび声や、何かがわれる音があちこちから聞こえました。ただこわくて、先生や

友達と夢中で校庭にひなんしました。しばらくして、お母さん達が迎えに来て、みんな帰って行きました。ぼくのお母さんも仕事場からかけつけてきました。お母さんの顔を見たら、安心して涙が出ました。それから、お父さんとお母さんは、家に入りもせず、手分けをして、近所の一人ぐらしのお年よりの家をまわりはじめました。もちろんぼくも一緒に行きました。「大丈夫ですか。ケガはないですか。」と声をかけると、泣きながら、手をにぎり、「ありがとう、来てくれたんだね。」と言ってくれました。倒れた冷ぞう庫や、割れたきけんな物を片づけたりしました。

ぼくは、まだレスキュー隊ではないけど、今のぼくにもできることが、こんなにあるんだと思いました。

家に帰ったころは、薄暗くなっていました。近所の人たちと声をかけあったり、飲み水や食糧を分け合ったりと助け合いました。大都会では、となりの人の顔を知らないなど聞いたことがありますが、ぼくの住む茨城県はこんな時でも、みんなで助け合う大切な心があり、とてもうれしいし、安心して生活できます。色々なことを考えさせられた震災でした。

あれから五ヶ月が経ち、今では辺り一面、豊かな緑と自然にあふれ、ぼくの家でも、野菜が豊ふに実り、花がたくさん咲き始まりました。きけんだった道路なども、すぐに工事がはじまり、あっという間にほとんどきれいになりました。学校も、すぐに元にもどり、おいしい給食も、おなかいっぱい食べられます。でも東北は今でも大変で、つらく、さみしい思いをしている人がたくさんいると思うと、本当に悲しいですが、今のぼく達にできる事を、真けんに考えて生きて行きたいと思います。

ぼくの住む茨城は本当に幸せだと思います。豊かな自然と、心かよう、となり近所や学校、家族や友達にも囲まれ、みんなと協力しあいながら、毎日安心した生活を送れています。

だからこそ、今改めて心に決めました。今度は、ぼくがいっぱい勉強して、レスキュー隊になり、ぼくの育ったこの大好きな茨城県を守る、正義の味方、イバライガーになります。

私が茨城県知事になったら

笠間市立笠間中学校　二年　九島（くしま）　佳椰子（かやこ）

私が茨城県知事になったら、茨城県のあちこちの里山を、できるだけ手を加えず、最低限の駐車スペースの確保や、歩道の草刈りだけに留めただけの、自然に近い公園として整備したいと思います。

私は毎年夏になると、必ず行く場所があります。その場所は、那珂川の支流の、常陸大宮市の相川という沢で、上流に民家も無く、水がとてもきれいで自然がいっぱいの素晴らしい楽園です。

私の住む笠間市が三十五度を超えた日でも、相川の浅瀬であれば、二十七度程度にしかなりません。笠間市の気温が三十三度を超えてくると、子供の遊びを特に好む訳でもない母が、

「相川に行くから友だちを誘っておいで。」と言うので近所のみんなを誘い、私の家のワンボックスカーに乗れるだけ乗って、大勢で相川に行きます。一緒に行った友だちも、おまけで付いて行ったその子の親までも繰り返し行きたくなるぐらい、誰もが心を奪われるような素晴らしい場所です。

妹が赤ちゃんの頃は、普段ほとんど昼寝をしませんでしたが、夏の暑い日に相川に行き水深五センチほどの浅瀬の木陰に、寝ている妹をベビーカーごと入れておくと、何時間も昼寝をしていました。

小学生になると、近所の友達も誘って大勢で相川に行く様になり、魚獲りも徐々に上手くなって、カジカの様なすばしこい大物も獲れるほどになりました。時には、浮き輪に乗って短い急流を下ったり、大木からぶら下がる藤づるにぶら下がって、深みに飛び降りる様なターザンごっこをしたり、滝に登って滝つぼを探検したりもしました。水に潜り過ぎて寒くなると、日なたのアスファルトで体を温めた後にトンボ採りをしたりと、一日中飽きることはありません。その間大人たちは、浅瀬で読書をする人、ビールを飲む人、子供と一緒に魚獲りに夢中になる人、昼寝をするお年寄りなど、大人も思い思いに過ごします。みんな居心地が良いので、夕方まで誰も帰ろうとは言いだしません。私はあまりに楽しすぎて、夏の間はずっと相川に住みたいと思ってしまうぐらいです。

その楽園の様な相川の下流に、間もなくダムが完成します。農業用水を確保する為のダムです。かつて下流の那珂市周辺で、まだ農業人口が減少する以前に、農業用水が不足した時代があった名残で、農業用水が不要になった今も、ダムの使用名目を変えて建設は続行されているそうです。そしてダムの建設が進むにつれて、相川の遊べるポイントもどんどん減っていきました。

今は草を掻き分け、マムシに気をつけながら沢まで下らなくてはいけないようなポイントしか残っておらず、昨年からはそのポイントすら、祖父に草刈り機で刈り取ってもらわないと立ち入ることができなくなってしまいました。恐らくもうこのまま何もしなければ以前の様に自然のままの相川で遊ぶことはできないでしょう。

私が大人になり子供ができたら、子供を相川の様な素晴らしい自然の中で遊ばせてあげたいし、おばあちゃんになったら、今度は孫を沢山連れて行きたいと思っています。

茨城県内には、私が知るだけでも、ほんの少し駐車スペースを整備して、ほんの数メートル草刈りするだけで、安全に沢遊びなどができる場所が沢山あります。

大規模で駐車場も大きく、立派な遊具がある公園は沢山整備されていますが、実際に遊ぶと、自然に近い場所での遊びの方がずっと楽しく、幅広い世代が一緒に楽しめます。本当に快適で、みんなゴミも散らかさず、多少の怪我も自己責任で管理できていける、野趣いっぱいの自然な公園を、茨城県内のあちこちの里山に整備するのが夢です。

災害に負けない茨城になろう

県立下妻第一高等学校　二年　渡辺　葵

二〇一一年三月十一日十四時四十六分、この時私は、体育館から教室へ移動中で、階段を上っている途中だった。激しい揺れを感じ急いで校庭へと避難した。こんなに強く長い時間の揺れは、今まで一度も経験したことがなかった。とても恐ろしくて、大げさに言えば、死ぬんじゃないかと思った。幸いにも、スクールバスで通学している私は、すぐに自宅に向けて出発することができた。しかし、常総線は不通になってしまい、自宅に戻れない人たちは、学校に残された。自宅へ向かう道路は渋滞し、いつもの何倍も時間がかかった。それでも私は無事に帰宅することができた。

地震後すぐに停電になったせいで、灯りも暖房もつかず、暗くて寒い夜を送ることになった。水道とガスは使うことができたので、懐中電灯で灯りをともし、何とか食事をとることはできた。情報はラジオと携帯電話のみしか入ってこなかったし、電池と充電切れが心配だったので、ずい分早くに寝た。

次の朝も電気は停まったままだった。この時初めて、今までどれだけ電気に頼って生活していたのか思い知らされた。電気が使えないだけで生活がこんなに不便になってしまうのかと情けなくなった。

十二時頃になってやっと電気は復旧した。たかだか半日ちょっとの間だったが、いつになるかわからない復旧を待つ時間は、とても長く感じられた。急いでテレビのスイッチを入れると、三陸沿岸の壊滅的な映像が目に飛び込んできた。津波によって一瞬にして壊された建物や地区全体は、とても現実のこととは思えなかった。そしてその被害は太平洋沿岸に広く、私の住んでいる茨城県にまで及んでいるということが、わかってきた。天井が崩れ落ちた茨城空港や金具が外れ駅名の入った看板がホームに垂れ下がった水戸駅――すべてが地震の規模のすごさを物語っていた。

さらに、日を追うごとに被害は拡大していった。私の住む古河市は、屋根の瓦が崩れ落ちたり、ブロック塀が倒れたりしたが、他の地域に比べたら全然ましであった。被害の大きかった地域では、橋が崩落したり、道路が液状化され陥没したり、ガスや水道も止まったままであった。

現在までに、死者行方不明者は二十五人、一部損壊も含めた家屋の被害は十三万戸にも達しているそうだ。茨城の被害額は宮城、岩手、福島に次ぐとも言われている。大きな打撃を受けた港は復旧には膨大なお金と時間がかかり、道路や橋など完全な復旧は、まだまだ先になりそうだ。

さらに、地震・津波以外にも原子力発電の事故による影響も出ている。一時は農産物や魚が出荷規制になり、規制が解除された後も「風評被害」を受けている。

それでは今後復興に向けて、私たちは何をすべきなのだろうか。また何ができるのだろうか。

まずは復興に向け、道路は圏央道と東関東自動車道を完成させ、港湾も一刻も早く復旧させることが必要となってくるだろう。また茨城空港の活性化には、原発事故の収束が不可

欠になってくると考えられる。原発の事故は農業、水産業、ホテル・旅館業へも影響を与え、今夏、茨城の観光地、海水浴場などの利用客が減ることは目にみえている。幸いにも、茨城県の放射線の計測体制は整っているので、例えば、魚にしてもきめ細かく検査をし、安全なものだけを消費者に出荷してもらいたいものだ。茨城は科学的根拠に基づいて安全なものだけを出荷しているのだという事実を全国の人に伝えたいものである。決して不正などなく誠実にやっていくしかないのだから。それにはまず、私たちが茨城県産の野菜や魚を率先して食べるようにしなければならないだろう。

最後に、今後の茨城だが、もしまた巨大地震が起きた時に私たちは今回の教訓を生かせるのだろうかと思う。耐震工事は進んでいるのか。東海村の原発は福島の二の舞にならないだろうか。行政に頼らなければもちろん何もできないが、私たち個々が自分の身は自分で守るよう努めなければならないのではないか。自分たちの避難場所の確認や避難具の準備などやるべき事はいくらでもある。大地震がいつ起きても困らない心の準備は必要である。まずは茨城県人として今後どのような状況におかれても、負けないで立ち向かっていく強い心を持ちたいと思う。茨城が好きだから、震災前よりももっとすばらしい茨城になることを願っている。

大好き いばらき 県民会議 理事長賞

だいすき！ いばらき

稲敷市立あずま南小学校 一年 根本涼太

ぼくはいばらきでうまれ、たくさんのしぜんにかこまれてせいかつしています。いちばんみぢかでいばらきをだいひょうするものとして、かすみがうらがありました。かすみがうらはおばあちゃんのいえのすぐうらにありさかなつりをしたり、ていぼうにのぼってさんぽをしたりとうまれたときからちかくにありました。そこでさんぽをしてきづいたのはゴミがすてられていてよごれているということです。おばあちゃんにむかしはかすみがうらでおよげたとききました。みんながきょうりょくしてゴミをなくせばまたおよげるひがくるとしんじています。

つぎは、つくば山のおもいでです。まだようちえんせいだったころかぞくでのぼりました。おおきないわのあいだをのぼるのはとてもたいへんでしたが、ちょうじょうでみたけしきはとてもかんどうしました。

また、つくばはいろいろなけんきゅうをするしせつがおおく、あるショッピングセンターにいったときにはロボットがてんじされていてみらいのようすをすこしだけたいけんすることができました。

しかし、三月十一日の大じしんでいばらきけんもおおきなひがいをうけました。ぼくのだいすきなかすみがうらもていぼうがくずれてしまい、さんぽもできなくなりました。でんちゅうはおれまがり、どうろはでこぼこでした。いばらきのしぜんがはかいされ、このままもどらないのかとしんぱいしましたが、ていぼうにつちがもられ、シートでおおわれすこしずつもとのすがたにもどってきています。まだまだじかんがかかりますが、このゆたかなしぜんがいつまでもつづくようにぼくたちはいばらきをこれからもみまもっていきたいです。

じしんにまけない

筑西市立下館小学校 一年 椙本遥希

三がつ十一にちに、しんど六のじしんがありました。さいしょからつよかったので、おとうととこたつのしたにはいりました。こたつのなかにいたとき、かわらがたくさんおちてくるおとがしました。

「がらがら、ぱりん。」

ものすごくこわかったです。

じしんがおさまったあとでそとにでると、かわらがたくさんおちていて、どうろにもちらばっていました。ゆうがたになってから、おじいちゃんとかわらをかたづけました。たくさんおちていたのでたいへんでした。つぎのひもおとうさんとおとうととと三にんでいえのまわりにおちているかわらをかたづけました。こんなにおちているなんて、すごいじしん

だったんだとあらためておもいました。
しばらくのあいだよしんもあったので、おじいちゃんのいえにひなんしていました。ぼくのいえはみずやでんきがすぐにつかえたので、一しゅうかんでもどりました。でも、あめがふるとあまもりがして、いえがこわれてしまうのではないかとおもいました。ともだちのいえでは、しばらくのあいだみずやでんきがつかえなくて、ぼくのいえでみずをくんだり、せんたくをしたりしていました。ぼくのいえよりたいへんだとおもいました。
なつやすみになって、やっとやねがなおりました。でも、かべはなおっていません。じぶんのいえにすめないひとのことをかんがえれば、ぼくはしあわせなほうだとおもいます。いばらきけんでもたくさんのひがいがありました。まだこまっているひともたくさんいます。みんなでたすけあってせいかつすることや、じしんにまけないきもちをもつことがたいせつだとおもいます。ぼくはいばらきけんがだいすきです。はやくみんながもとどおりのせいかつができるようになってほしいとおもいます。

わたしのゆめ

日立市立大沼小学校　一年　尾崎瑠奈（おざきるな）

わたしは、おはながすきです。
はなびらが、きれいです。たくさんのいろやかたちやかおりが、くみあわさっているのがふしぎで、おはなにかこまれてせいかつしたいとおもいます。だから、わたしのゆめはおはなやさんになることです。
まいにち、たくさんのおはなにかこまれて、おはなのなまえをおぼえられて、しらないおはなにもあうことができるなんて、すてきなことだなとおもいます。
おはなは、いのちがあります。おはなのおせわをすることは、たいへんだとおもいます。
あついとき、さむいとき、どうやっておせわをすればいいんだろう。
おはなをすきなだけではおはなやさんにはなれないんだなとおもいました。べんきょうすることがいっぱいあるんだなとおもいました。
うれしいことがあったひとに、おはなをあげて、よろこんでもらいたいです。
かなしいことがあったひとには、おはなをあげて、あかるくなってほしいとおもいます。
おはなは、ひとのこころをあかるくしてくれるんだなとおもいました。
じぶんで、かんばんをつくって、かわいいおみせにしたいです。
みんながあかるく、げんきになるようなおはなやさんになりたいです。

みらいのいばらき、みらいのじぶん

筑西市立五所小学校　二年　須藤琴美

みらいのいばらきは、もっともっと人がふえて、もっともっとたのしくなると思います。今は、ほうしゃのうのしんぱいで日本の人はがっかりしています。でも、わたしが大きくなったら、みんなしあわせでげん気でいられるかなって思います。

わたしのゆめは、マザーテレサみたいになることです。そして、たくさんの人たちをたすけたいです。せかい中をまわりながら人びとをたすけたいです。人びとがよろこぶかおをみたいです。わたしが一ばんつたえたいことは、男の人も女の人もかんけいなくだれにでもやさしくすることのたいせつさです。日本は、男女のくべつがあって、男の人はこうあるべき、女の人はこうあるべきということがあります。そんなくべつなく、みんなにやさしさをそそげる日が来ることをねがっています。そして、みんななかよく、けんこうにくらせたらいいなと思います。わたしは、まだまだマザーテレサにはなれないけど、いつかきっとマザーテレサみたいにせかい中の人をたすけたいです。

今のわたしは、子どもだから、日本をはげませないけれど、ほかの国の人がおうえんしてくれています。だから、今のじぶんにできることをがんばりたいと思います。

マザーテレサやサリバン先生はわたしの中で一ばんすきな人物です。この二人の話はみらいのいばらきの子どもたちにも読んでほしいです。

みらいのいばらきは、ほんとうにたのしいかな、わたしはマザーテレサみたいになってるかなと、いろいろかんがえるとわくわくします。

みらいは、わからないけれど、そうぞうするとたのしくなります。みんなにこにこしていて、えがおがたくさん見られると思います。

わたしのしょうらいのゆめ

つくば市立小田小学校　二年　長戸永実

「おいしゃさんになって、ノーベルい学しょうをとる！」

これが、わたしのしょうらいのゆめです。こういうと、大人はみんな「にやっ」とわらいます。わたしは本気で言っているのに、「えっ、ホント？」と言うかおをします。でも、わたしが赤ちゃんのときからずっとみてくれているおいしゃさんは、

「あぁそう。先生はおはかでたのしみにしているからね。」

と言ってくれました。とてもうれしかったです。

おともだちに言うと、みんなかならず、

「ノーベルい学しょうってなあに？」

と聞きます。わたしもさいしょは、しりませんでした。

はじめてノーベルしょうのことをしったのは、一年生の秋ごろでした。いろいろな人のでん記をお母さんに読んでもらったときに、ダイナマイトをはつめいしたノーベルがノー

ベルしょうを作ったことや、いろんなえらい人がノーベルしょうをとっていることをしりました。だから、それまでの「パパみたいなおいしゃさんになる」というゆめが、「おいしゃさんになってノーベルい学しょうをとる」にかわりました。

なかでも、フレミングが青かびからペニシリンというおくすりをつくったみたいに、人にうつるびょうきをとめるくすりをはつめいしたいです。なぜなら、きょねんインフルエンザにかかったとき、たんがたまって、いきがくるしくなって、はきそうだったけど、おくすりですごくらくになったからです。

つくばには、けんきゅうじょがいっぱいあって、ノーベルしょうをとった人もいます。でも、ノーベルい学しょうをとった人はまだいません。だから、わたしが大人になるのはなん年もかかりますが、がんばって一ばんのりにノーベルい学しょうをとりたいです。

わたしの自まん、ふるさといばらき

桜川市立坂戸小学校　二年　福島優希

一年生の時、いばらきけんみんかいぎのひょうしょうしきで、はじめてはし本ちじさんを見ました。テレビで見た時とはちがって、大きくてがっしりしていて、とてもたのもしい人に見えました。毎日、いばらきけんで作ったおいしい米やおにく、やさいやくだものをもりもりたべていると、ちじさんのようながっしりとした体かくになるのかなと思いました。わたしも、いばらきけんさんのたべものが大好きです。たくさんたべて、じょうぶな体になって、ちじさんのように大きくなりたいです。

わたしは、家ぞくで東京へ行く時、つくばエクスプレスをよくりようします。でん車の中も、えきのホームもきれいで、スピードもはやいので、すぐに目てき地につきます。お母さんも、

「ティーエックスが出来て、本とうにべんりになったわ。」

とよろこんでいます。つくばエクスプレスのおかげで、出かけるのが、もっと好きになりました。

つくばには、けんきゅうじょがたくさんあります。地きゅうや、うちゅうのふしぎについてしらべているそうです。わたしは、サイエンスツアーが夏休みの楽しみの一つで、きょ年は森林けんきゅうじょとつくばうちゅうセンター、今年は地図とそくりょうの科学かんと地しつひょう本かんを見学しました。地しつひょう本かんでは、きょ年福島で、はっくつ体けんで見つけた化石について、はかせの先生にいろいろ教えてもらいました。わたしは、うちゅうのことや古だいの化石が好きなので、とてもたのしかったです。

わたしが、生まれそだったいばらきけんに、せかい中がちゅう目するけんきゅうをするところがあるなんて、とても自まんに思います。これからも、いばらきのよいところをしらべて、みんなに教えていこうと思います。

わたしのしょうらいのゆめ

鉾田市立白鳥東小学校　二年　津久井（つくい）　楓（かえ）　乃（の）

わたしのしょうらいのゆめは、がかになることです。なぜかというと、絵が大すきだからです。おかあさんの話によると、二さいくらいから、えんぴつをもって紙にらくがきをしていたそうです。

もし、がかになることができたら、せかい中をたびしてたくさんの人と出会って、いろいろな絵をかきたいです。

わたしは、風けいをえがくのがすきなのでせかい中をたびして、いろいろな海、いろいろな空、出会った人のえがおをかくことができたら、うれしいです。

ただ風けいをえがくだけでなく、たくさんの人との出会いでじぶんの絵も、やさしい絵になっていくのではないかと思います。

今、日本は東日本大しんさいがおきて、大へんなことになっています。わたしのいえは、ひがいはすくなかったのですが、おばあちゃんのいえがつなみにあってしまい、おばあちゃんのいえの一かいは水でいっぱいになってしまいました。そんなときに、いえのかたづけを手つだってくれたのがボランティアの人たちでした。

わたしもいつか、そのボランティアの人たちのように絵を通して、たくさんの人たちに元気をあたえられるようながかになりたいと思います。

つなげたい、大好きな気持ち。

土浦市立土浦小学校　三年　前原（まえはら）　栄太（えいた）

ぼくは、いばらき県が大好きです。ぼくのすんでいる土浦市は、さくら川があります。春には、たくさんのさくらがさいて、きれいです。秋には、花火大会があって、たくさんの人がやって来ます。花火は何発も上がって昼間のように明るくなります。ぼくは、とくに赤い花火が好きです。

他にもいばらき県には、ぼくの気に入っているものがたくさんあります。ミュージアムパークには、ぼくが大すきなきょうりゅうがいます。海も近くにあって、海からの日の出はさい高です。大すきなメロンの生さんりょうも日本一だと聞いています。このように、いばらき県は、緑がゆたかな住みやすい所だと思います。

ぼくの家族や親せきのほとんどがいばらき県に住んでいます。ぼくの思い出もいっぱいあります。ぼくは、これからもずっと、いばらき県に住みたいです。三月の大きな地しんの時も近所の人たちで声をかけ合いながらがんばることができました。いばらき県の人たちはやさしくがんばり屋だと思います。

ぼくが大人になった時、科学はもっと進歩していると思います。地きゅうにやさしい車が走ったり、エネルギーを上手に使って生活したり、かすみが浦や海の水を今よりもっときれいにしたりできるようになると思います。そんな未来のいばらき県で、ぼくは、家族となかよくくらしていきたいです。

春には、花見をして、夏には海水よく、秋に花火を見て冬はきれいな雪で遊んであげたいと思っています。そして、ぼくの子どももいばらきが好きになってほしいです。いばらきを大好きな気持ちが、ずっとずっとつながっていったら、未来のいばらき県は、もっとすてきになると思っています。

未来に向けて、今私ができること

常陸太田市立幸久小学校　三年　酒井理花

今は、夏です。毎日毎日、とても暑いです。でも、もっと地きゅう温だんかが進むと、今よりも、暑くなるのかなと思ってしまいます。

お父さんやお母さんに話を聞くと、むかしの夏は、こんな暑さじゃなかったと言っていました。冬のさむさも、もっとさむかったと言っていました。その話を聞くと、やっぱり地きゅう温だんかが、進んでいると感じます。

私は、どうして温だんかがすすむのかを考えてみました。テレビの番組で、電気をたくさんつかったり、ゴミをたくさんもやしたりすることがいけないと知りました。だから私は、未来の地きゅう温だんかをふせぐためには、リサイクルやせつ電をすることが大切だなと思います。そのために、子どもの私にでも出来ることは、少しでもむだな電気を使わないように、毎日の生活をすることです。たとえば、私がやっていることの一つには、夜、トイレやおふろに入った後に、電気をかならずけすことです。いつもわすれないでしています。それから、きそく正しい生活をすることも、せつ電になると思います。夜、いつまでも起きていると、部屋の電気やテレビを多く使ってしまうからです。そのほかに、ゴミの分べつのお手つだいをしています。子ども会のはい品回しゅうは、大すきなお友だちやその兄弟といっしょに、話しながらできるのでとても楽しいです。分べつすることで、ペットボトルや空きかんが、べつの物に生まれかわるので、むだなゴミにしないよう、これからもつづけていこうと思っています。私ができるこんな小さなことでも、私たちの未来が、よくなることをしんじてやりつづけることが、一番大事なことだと思います。

音楽で元気にしたい、私のまちいばらき

土浦市立大岩田小学校　三年　淀縄遥

私は、いばらき県が大好きです。それは、私が生まれて育った県で、お父さんやお母さん、それからたくさんのお友達も住んでいるまちだからです。

私は、今、いばらき県は、元気がないと思います。それは、三月十一日に東日本大しんさいがおきて、今でもとてもつらい生活をしている人たちがたくさんいるからです。私は、大好きないばらき県が、地しん前みたいに元気になってほしいです。

私は、ピアノと音楽が大好きです。ピアノは、幼稚園の年長から習いはじめました。なぜピアノが好きかというと、ピアノをひくととてもすっきりした気持ちになるからです。それと、ピアノをきいていると、楽しくなって、元気になるからです。それから、心が落ちついて、やさしい気持ちにもなれるからです。私は、元気がない時は、ピアノをひいて、音楽をきいて、元気になっています。

だから、いばらき県の元気がなかったり、つらい思いをしたりしている人たちにも、私のようにピアノをひいたり、ピアノの音楽をきいたりすれば、とてもよい気分になれると思います。

私がピアノを好きな理由は、もう一つあります。それは新しい曲にチャレンジする時、はじめは、むずかしいけれど、毎日練習をつづけることで、かならずひけるようになり、その時とても感動できることです。

私のしょう来のゆめはピアニストになることです。ピアニストになったら、いばらき県のみんなに、私のピアノをきいてもらいたいです。それから、小学生にピアノを教えることで、むずかしいことにチャレンジすることを教えたいと思います。

それで、いばらき県のみんなが元気になって、やさしい気持ちになって、むずかしいことにもチャレンジするような気持ちになればとてもうれしいです。

未来に向けてわたしがやりたいこと

水戸市立三の丸小学校　四年　髙木魁士（たかぎかいし）

「ゴロゴロゴロ、ドーン。」

今年の夏休みもたくさんのかみなりにそうぐうしました。ちょっとふるえながら家の中でかみなりがおちる様子をみていました。かみなりが光るたびに、三月のしんさいのことを思いだします。

しんさいのとき、数日間電気のない生活をしました。わたしのすんでいるマンションは、オール電化なので、テレビやＩＨクッキングヒーター、おふろ、照明、エアコンなど生活に必要な物が、すべて使えませんでした。電気が使えない生活がこんなにふべんだとは、自分の想ぞうをこえるほど大へんなものでした。

しんさいをけい験して、強く思ったことがあります。それは、かみなりの電力を生活で使う電力に役立てる事ができないのかということです。

かみなりの電あつは、しゅん間的に、数億ボルトと言われています。それをむだなく家ていで使える電力にかえることができたら太陽光、風力、地熱とともに生活に役立つ自ぜんエネルギーとして活用できます。

しかし、それには大きな課題があります。かみなりがはっする大きな電力をうけとめることができるせつびをつくったり、その電力をためておくせつびをつくったりしなければなりません。

先日、東部ガスへ行って節電について調べ学習をしてきました。発電所から家ていに電力がとどく間に、約九十パーセントの電力が無だになっているそうです。そこで、ガス会社では、ガスで発電することで、こうりつのよい電力をつくり、節電に役立てているという話を聞きました。

「家ていでつくった電力はためておくことができますか。」と、しつ問したところ

「今のマイホーム発電にはつくった電力をためておけるせつびはなく、今のぎじゅつではむずかしいことなんだよ。」とこたえがかえってきました。ちょっとざんねんだなと思うと共にそれだけ今の科学ではむずかしいぎじゅつなんだなと思いました。

しかし、これからの未来に向けて、自ぜんエネルギーをこうりつよく活用することが、必ずもとめられてきます。だからわたしは、しっかり勉強して、むずかしいと言われているかみなりという自ぜんエネルギーの利用を発明したいと考えています。そして、かみなりもふくめた自ぜんエネルギーを活用したかんきょうにやさしく、さいがいに強い町づくりをいばらきがモデルとなり、世界に向けて広めていきたいと考えています。

ぼく達のくらしと農業

水戸市立鯉淵小学校　四年　山崎（やまざき）　幸太（こうた）

三月十一日、ぼくは生まれて初めて、ごはんを食べるための努力をした。むかえに来た母の車で家に帰ると、青ざめた表じょうで近所のお母さん達が何人か集まって、無事をかくにんし合ったり、ひがいじょうきょうを聞き合ったりしていた。すると、だれかが、

「食材かく保。お水もかく保。」

と、大きな声でさけんだ。ぼく達もあわてて車を走らせたが、ぼく達がついたころには、おにぎりやパン、お水がすでに売り切れていた。とりあえずすぐに食べられそうな物をかごにつめ、長い列にならんでやっと買う事ができた。夜になると、おじいちゃんとおばあちゃんが、温かいごはんをとどけてくれた。話を聞くと、お茶でお米をとぎ、まきで火を起こしてごはんをたき、地しんでゆがんだデコボコの道を通って来てくれたそうだ。おじちゃん達もぼくの家に集まり、みんなでしおおむすびを食べた。大好物のからあげは無かったけれども、みんなの無事な顔を見ながら食べたおむすびは最高においしかった。温かい食べ物があると言う事は、とても心がホッとする事なんだと、あらためて実感した。

夏になると、とうもろこしやキュウリ、ナス、スイカなどを軽トラックにたくさん積んでおじいちゃんがとどけてくれる。その野菜達は、おじいちゃんご自まんの太陽のにおいがするしんせんな野菜だ。おじいちゃんはいつも、

「虫も食べに来るくらいうまい野菜なんだぞ。」

と、じょうだんを言って元気に笑う。たしかに、とうもろこしの皮をむくと、時々虫が出て来てびっくりする。見た目はいまいちだけど、取りたてでしか味わえない最高の味がする。秋になると、ふっくらつやつやの新米が味わえる。毎年

五月の田植えを手伝っているので、たくさん収かくができた時には、ぼくもうれしい。ご自まんの野菜を持って、元気に笑っていたおじいちゃんの気持ちが、この時少しだけ分かった。

地しんの直後、お肉や野菜がなかなか手に入らなかった。ぼくは、スーパーに行けばふ通に買えると思っていたので、何もならんでいないたなを見て不安になった。なのに、テレビのニュースでは、放しゃのうの風評ひがいで、出荷ま近の野菜を泣きながら、畑でしょ分している農家の人のすがたが映った。きっとこの人も、しんせんでおいしい野菜をみんなに食べてもらおうと、一生けん命がんばっていたのに、すごくくやしいだろうなと感じた。

今までおいしいと言って食べていたが、作ってくれている人に感しゃの気持ちを持っていただろうか。きっと農家の人やおじいちゃんの笑顔を思い出しながら、感しゃの気持ちで味わえば、もっともっとおいしくてぼくも笑顔になると思う。これからも安全でおいしいいばらきの野菜をたく山食べたいと思う。

未来へのメッセージ

石岡市立南小学校　四年　阿部成美（あべなるみ）

今年の夏は、せん風機やすだれ、あみ戸サッシなどがよく売れているとニュースで聞きました。これは、東日本大しん災と津波による原発事故の電力不足からくる「せつ電対策」の一つです。

私も地しんによってたくさんの不便さを感じ、学びました。まず水の出ないじゃ口、かい中電灯での夜の生活、電気を使わない簡単な食事、車を使用せず、自転車や徒歩での移動などです。これによって、不便さも感じましたが、今まで当たり前だった生活が、どれだけ無だづかいをしてきたのかと思うようになってきました。だからこそ、「今の私に出来ることは」と考えるようになりました。

まず、「せつ電」です。必要のない電気は消すことやコンセントをぬくことなど、ほんのちょっとしたことですが、家の中や学校でもよびかけ合って、電力を大切にしていきたいです。日本でも電力不足から「せつ電」をよびかけたことによって、たくさんの会社や一人ひとりが工夫して生活することで、電力の使用量がおさえられていることが分かりました。また、私の家の屋根には、太陽光パネルを設置しました。このことで、毎日の電気が、いつ、どんな時に使われているのかや、太陽の光でどれくらい発電しているかたしかめることができます。そして、「せつ電」の意しきも、家族の一人ひとりが高まっています。

つぎに、食べ物を大切にすることです。家での食事はもちろんのこと、私が一番気にかけていることは、給食です。「ごちそうさま」のあと、食かんには、ものすごい量の食べ残しがある時があります。東日本大しん災で、ひなん生活をしている人たちは、配給された飲み物とパン・冷たいおにぎりなどを食事にしているすがたをテレビでみました。また、世界には、栄養が満足にとれず命をおとしていく子どももたくさ

んいるそうです。
だからこそ、私たちの成長のために、心をこめて調理してくださっている方がいることをわすれず、感しゃして食べたいと思いました。そして、食べ物を大切にする心をクラスのみんなに広めるために、二学期は給食係になって、「残しゼロ」運動を進めていきたいです。
さいごに、助け合いの心をもつということです。人は、家族や友だちに支えられ、助けてもらって生きています。また、一人では小さな力だけど、たくさんの人が集まれば大きな力となることも学びました。だからこそ、助け合う大切さを忘れずに生活していきます。そしてこの心が明るい未来へつながっていくことを信じています。

目指せ、ナンバーワン

つくば市立葛城小学校　五年　香取詩歩

先日、私は茨城県についての調査結果を見てとてもショックを受けました。それは、茨城が「み力のある観光地」としてワーストワンになってしまっていたことです。
昨年、茨城県に引っこしてきて、茨城のふん囲気を気に入っていたのに、全国の人たちには知られていないことに、がっかりしたのです。
私のおうちからも見える「つくば山」や日本で二番目に大きい「かすみがうら」などのすばらしさは、茨城の中でもほこれる自然の風景だと思います。五十年くらい前に、私のおばあちゃんは、かすみがうらで湖水浴をしていたと聞いたことがあります。底まで見えるとうめい度の高い水だったそうです。それが、この前弟の付き合いでかすみがうらにつりに行ったら、黒いような緑のような色で、おばあちゃんのいっていた事とはまるでちがっていました。私はその時、「このかすみがうらがまた昔のようにとうめいな水になって、湖水浴をしたり、魚といっしょに泳げるようになったらいいな」と思いました。
以前、住んでいた福島県にある「いなわしろ湖」では、湖水浴をしたことがあります。ごしき沼という湖の色はずっと見ていたくなるくらいの美しさでした。かすみがうらもこんなきれいな水の色になれば、もっともっとみ力がでるのではないかと思います。水がきれいになるように、私も生活の中で食べ残しの油やしょう油などそのまま流したりしないなど、かん境のことまた水の色のことを考えてくらしていきたいです。
いつかつり人ばかりでなく、外国の人がバカンスにおとずれるくらいのきれいな「かすみがうら」になってほしいです。ちょうど茨城県にも小美玉市に空港ができたので、その空港を外国のお客さんがどんどん利用できれば、もっともっと便利になると思います。そして「茨城」という名前が、外国でも有名になってほしいです。
今、私は、一つの夢を思いえがいています。それは、エメラルドグリーンの湖によみがえったかすみがうらのそばで、大好きなクロワッサンを焼いて、外国のお客さんにふるまうカフェを開くことです。その夢を実現させて、「目指せ、ナン

バーワン」。

わたしが伝えたいこと

桜川市立南飯田小学校　五年　安田（やすだ）　桃佳（ももか）

「現地の安田さん。」
「はい、かわらやへいがくずれ落ち、こちらは大変な状きょうです。」
どの番組も、こんな報道ばかりでした。
あの大震災で、わたしの家もかわらが落ち、雨もりがし、へいがくずれ、家の土台にきれつが入っただけでなく水道管がはれつしました。今でもまだ、家も学校も、元通りになっていません。
こんな時、あのお祭りが復活していたら。
間中には　古式ゆかしき　ささら舞
これは、わたしの住んでいる地区が岩瀬町とよばれていたころに作られたカルタです。三十九件の小さな集落間中には、江戸時代より伝わる「ささら舞」があります。しかし、二十年前から行われていません。
わたしは、このお祭りについて昨年調べました。祖父は、わたしが「ささら舞」に興味を持ち始めたことを知ると、とてもうれしそうに語ってくれました。祖父と二人でビデオも観ました。間中に、こんなにたくさんの人がいたのかと思うほどにぎやかでした。どの家にも客が大勢来て、十数キロもある町から出店をめあてに自転車をこいで子ども達がやって来たそうです。
わたしは、それを知ってから、ときどき、体力づくりのトレーニングのためにお祭りの行われた神社まで上り、ゴミ拾いをしています。神社をきれいにしていればそのお祭りが復活するような気がしたからです。
わたしの夢はアナウンサーになることです。
「現地の安田さん。」
「はい、わたしは茨城県桜川市にある間中に来ております。こちらでは、三十年ぶりに復活したささら舞の準備におわれています。」
「現地の安田さん。ささら舞の準備の方は、整いましたでしょうか。」
「はい、横笛とざっつぁこの音にさそわれてみなさんが集まってきました。こちらではすでにたくさんの子どもたちが出店で買い物をしています。」
大震災から十年が過ぎ、すっかり元気を取り戻した、明るい茨城の情報をたくさん伝えていくのがわたしの夢です。
「現地の安田さん。」
「はい、茨城の空は今日もすみきっています。これから、県庁に入り復興十年の歩みについて県知事にお話をうかがいます。」
こんなインタビューをしたり、
「明日は、世界にほこる茨城の科学技術についてお伝えします。」
などとしょうかいしたりします。
そして、多くの外国人に茨城に関心をもってもらい、日本

の首都は茨城とさっ覚するくらい、美しく世界的な頭脳をもった強い茨城をアピールしていきたいと思っています。「はい、今日も、わたくし安田が茨城のみ力についてお伝えします。」

明るい茨城の未来へ

小美玉市立堅倉小学校　五年　滑川美空

もう夏休みも終わり、もうすぐ二学期が始まる。いつものように元気よく「おはようございます」のあいさつから始まるのが私の一日です。朝起きてから一番はじめに家族に、そして近所の人たち、学校で先生や友達に六回ぐらいはあいさつします。あいさつは、いつも顔をあわす人はもちろん、どこかで初めて会う人にもあいさつをしたことがあります。飲食店に行ったときのことでした。こんでいたので順番を待っていました。「こんばんは」の一言から、相手の人は「何年生、大きいね」「おなかすいたね」と会話しました。たった一声のあいさつから、その場をなごませてくれて、一日を明るくすごせる合言葉だと思います。夏休みの間も、「こんにちは」の明るい声がたくさん聞こえていました。

そんな私が住んでいる町は、明るい人達が作るおいしい野菜や果物があります。私の家の祖父も田んぼで米を作り、畑で野菜や果物を作っています。毎日かかさず田んぼや畑に行きます。私は祖父が作ってくれる甘いとうもろこしが大好きです。町の人達が作った野菜や果物はお店で販売されています。夏は真っ赤なトマトやスイカ、とうもろこしなど、たくさん並んでいます。たくさん手をかけて時間をかけて作った愛情つまっている新せんな野菜や果物です。すぐ近くでとれたてのものをもらったりして安心して食べています。

ところが、今年三月十一日に私の住んでいる町に大地震が起きました。家族に会えてほっとした所、信号がなく道路がじゅうたい。電気も水もない生活、お店では食料品の点数の制限があり、長い行列にならびました。便利な生活は当たり前ではありませんでした。たった一しゅんで便利な生活がなくなっていました。水も電気もないので、母が当たり前に炊はん器でたいていたお米もたべられませんでした。そんな時、町の人がおにぎりを作ってくれました。それは、ピカピカに光った真っ白いご飯に塩がついたおにぎりでした。うれしくて、おいしくて、あたたまりました。この時、私は、苦しい中でも他人を思いやる気持ちは、みんなを笑顔にできるんだと思いました。

私は最近、新聞やニュースを少し見るようになりましたが、悲しい出来事が多く明るいニュースが足りないように思います。しかし、今年大地震が起きた三月十一日のちょうど一年前に、私の町には未来をつなぐ茨城空港が開港しました。日本はもちろん、中国や韓国からも救出活動、温かい支えんがあったとニュースで知りました。ニュースで伝わってくるたび勇気をもらいました。明るい未来をつくるために、温かい思いがたくさんの力になっていくと思います。そして何十年後も、町の人たちが輝いていれば、住んでいる町も輝いていると思います。

災害に負けない茨城

桜川市立雨引小学校　五年　皆川佳穂

大きなゆれが起きた。おばあちゃんが、
「家がつぶれる、外へにげろー!!」
とさけんだので、わたしはまどからとびおり、庭の木の方へにげ出した。

三月十一日、午後二時四十六分、「東日本大震災」が起きたことを、少しもわすれることはできません。わたしはこの時、インフルエンザのため学級閉さで、宿題をやっていました。外から見た家は、屋根のかわらがバラバラと大きな音を立てて落ちてくる。家の中からは、物がたおれる音や「ガシャガシャッ」とせと物のわれる音が大きく外まで聞こえました。わたしは思わず悲鳴をあげてしまいました。地震の時間は数分でも、わたしには、立っていられないほどのゆれを、何時間と思えるほど長かったと感じました。

何度かなる余震にも、こわくて、こわくて、体がふるえてきます。

大きな地震が少しおさまったあとも、家の中には入れませんでした。物がたおれたり、こわれたりしていて、くつをはかないと歩けませんでした。夜になると、電気はつかない、水は出ないけれど、ガスだけがつかえたので「インスタントラーメン」三こをみんなで分けて食べました。おいしかったです。わたしは「いざ」というとき大切な物のことをはじめて知りました。かい中電灯、のみ水、食べ物、ロウソク、マッチなどです。初めての事に、おどろく事ばかりでした。

いちばん心配していたことは、仕事に行っているお父さんと連らくがとれないことでした。けいたい電話もつながらないので、どうしているか心配でいました。夜、家の中にいられないので、おじいちゃんの車にもうふをもちこんで、五人でねました。みんなでいると、少し安心します。家のまわりもまっくらで、明るくないととてもこわいから、車の中で、早く朝がくればいいなと願っていました。

二、三日して新聞を見ると、大津波で家が流されてしまったり、一つしかない、大切な人の命まで流されて、多くの人がなくなってしまった記事を見ました。

「なぜ、どうして、こんな地震が起きてしまったのだろう。」わたしは今でも、余震に体は外に向かって走り出してしまうのです。

大きなゆれの地震で、人の命、家、屋根、へい、墓までこわし、電気のつかない暗い夜、幸せな生活をうばったあの日がこないことを毎日いのっています。

今わたしができること、それは「節電」です。家の中でも、暗いと元気が出てこないので、使っていない家中のコンセントをぬく、(夏休みの私の仕事)冷ぞう庫の開け閉めを早くする、せん風機を使う、緑のカーテンを作る、わたしの家では「ゴーヤ」五本を植えました。緑でいっぱいです。これからも、茨城の未来に向かってがんばります。

私の街と夢と未来

坂東市立生子菅小学校　六年　染谷　聖菜

私の考える未来の街、それは緑あふれる森の中に保育園と老人ホームが同じしき地にあって、毎日交流ができる。そんな街ができたらいいなぁと思いました。

なぜなら、将来の夢が保育士さんになることだからです。なろうと思った一番のきっかけは、保育園に通っていた時に、先生がピアノを弾きながら歌ったり、みんなと鬼ごっこをしたり、何でもこなす姿が、とてもかっこよかったからです。

そして、ピアノを習い始めると両手で弾く難しさを知りました。五年生になり、いとこ達とピアノを弾きながらイス取りゲームの伴奏をしたり、曲に合わせて歌ったりすることが楽しかったので、こんな仕事があったらいいなと考えていました。

私は小さな子と遊ぶ事も好きですが、おじいちゃんとおばあちゃんも大好きです。でも私のおばあちゃんは老人ホームにいて、なかなか会えなくてさみしいし、おじいちゃんはもう死んじゃったけど大好きでした。

保育園と老人ホームが、一緒になれば毎日会えるかなと思ったからです。

おじいちゃんとおばあちゃんは老人ホームに行って、私は保育園の先生で、子供はそこに通えば、家族全員で行ける家みたいな場所があれば良いと思いました。

そして園の中で、野菜を育てて昼食などに使うことです。私の家は農家なので夏になると、ナス、ピーマン、トマト、キュウリ、ゴーヤなどの野菜が収かくできます。どれも新せんでおいしいのですが、特にトマトはお店にならんでいるのとちがって採れたては、ちゃんと野菜の味がします。みんなに、採れたての野菜のおいしさを、知ってほしいのです。

あと、森があってきれいな川の中にたくさんの魚が泳いでいる川があればいいなと思いました。お母さんの実家は草や木が多くて夏は風通しがよく、涼しいです。冬は木の葉が落ちて日当たりが良くなります。しかし私の近所では緑が減ってきているので、緑の多い街にしたいです。

そして、老人ホームの人達と、保育園の子供達が歌って、私がピアノを弾く。それが私のえがく未来です。

未来の茨城のために

土浦市立山ノ荘小学校　六年　大塚　みちる

私の将来の夢は、保育士になることです。小さいころから人見知りだった私が、たくさんの人と出会う、保育士になりたいと考えた理由は、二つあります。

一つ目の理由は、今、保育所等の待機児童が増えていると聞いたからです。「少子高齢化」が進んでいるのだから、待機児童は減るはずですが、今は、働きながら育児をするという女性が増えているため、保育所等の定員を増やしても追いつかず、結果として待機児童が増えてしまっているのです。母

から、市などに認められていない保育所や託児所等に通う子どもも多いと聞きました。私は保育士になって、そんな子ども達にもきちんとした保育を受けさせてあげたいと思います。

二つ目の理由は、三月十一日、東日本大震災が起きた際、一生懸命に子ども達を守ろうと、助けようとしている保育士の皆さんの姿に、心を打たれたからです。泣いていたり、何が起きたのか分からない。たくさんの子どもがいたと思います。それでも、全員の子どもを救った保育士さんも、たくさんいたそうです。屋上で、一晩中助けを待ったというニュースも見ました。保育士さんだけではなく、子ども達も、小さいのに、寒い夜をたえぬいたのです。救助が来た時の、みんなの笑顔は、わすれられません。ひなん所に行った子ども達の中には、親や兄弟など、大好きな人達を失ってしまった子もいたでしょう。保育士さんは、その子ども達をやさしい笑顔と言葉で支えていました。子ども達は、どれだけ安心したことでしょう。私は、あらためて、保育士は、大変な仕事なんだと感じました。

私は、このような、りっぱな保育士になるために、がんばっていることがあります。保育士になると、たくさんの人と話す機会が増えます。なので、習い事など、たくさんの人と会える時に、自分から積極的に話しかけるようにしています。そのことによって、だれとでもきちんと話せるようになりたいと思います。

私は、将来、「たくさんの子ども達の命を預かっている」という責任をしっかり持ったみんなに信頼される、りっぱな保育士になって、茨城の役に立ちたいと思います。そして、子ども達、また、大人の方も安心してくらせる茨城をつくりあげて行きたいと思います。

茨城に生きる

高萩市立秋山小学校　六年　関根喜涼（せきねきり）

茨城は自然豊かな県です。東には太平洋、西は緑の山々でとても美しいです。また、関東地方なので、首都から近く、便利な場所にあります。

しかし、今年三月、東日本大震災があり、茨城は大きな被害を受けました。今も余震が続いていて、以前のように心から安心した生活をおくることはできません。昨年、私の家には中国とアメリカから留学生がホームステイにきてくれました。二人は茨城の海をとても気に入ってくれました。アメリカの留学生は東京の大学生なので、夏には友達をつれて、また海に遊びに来てくれたほど、自然を喜んでいました。山に川遊びに行ったときは、故郷のテキサスを思い出すと言って、緑の豊かさに感動していました。その留学生と行った海は、地震で有名な岩が崩れ、さらに危険ということで、今年は閉ざされています。とても悲しいことです。いち早く、元の安心で住みやすい茨城になってほしいです。そのためには、地震に強い県にしなければなりませんが、私たちにできることはどんなことでしょうか。

私は、大地震から考えたことがいくつかあります。茨城は

地震が起こりやすいので、これからは、地震が起きてもあわてない安全な工夫をするべきだと思います。まず、地震の時、断水になりました。現代の生活は水道水に頼っているので、本当に大変でした。そこで、今度は地震の破壊力にも負けない、柔なん性のある水道管が必要だと思いました。また、地震により、原発の問題も起きました。私の家には太陽光システムがあります。停電中でも、昼間は電気を使うことができました。そこで、県では、ぜひ、太陽光を普及してほしいです。安全なエネルギーを使って、節電することで、自然を守ることにもつながります。さらに、津波で海の近くでは大きな被害を受けました。そこで、これからは津波対策をしっかりして、ひなんできる安全な場所を作るなども必要だと思いました。夢のような話ですが、地震が起きたら飛行船のように飛んでひなんできるビルを各町や学校につくるなんてことも、ありえる県になったらすごいと思います。道路もたくさん被害を受けました。今、ドクターヘリが活躍していますが、災害で多くの人を運んだり、警察がスピーディーに行動できるように手軽に操作できる空飛ぶ車も未来にはあたり前にあってほしいです。

地震はとても怖いですが、私たちが経験したことを生かさなければなりません。何が必要であるのかも改めて分かったことが多いです。それに、もしかしたら、もっとすごい災害が起きるかも知れません。それでも安心して生活できる茨城であるために、私たちは実現できることをしなければなりません。新技術と自然が一体化した茨城を目指して、私も勉強して、将来役に立てる人になりたいです。

茨城の医りょうの未来、ぼくの夢

北茨城市立中郷第二小学校　六年　川里康太（かわさとこうた）

ぼくの夢は、医者になることです。

この夢を決定的にしたのは三月のあの出来事でした。三月十一日の東日本大震災の後、ぼくは何もできずに家で過ごしていました。数日後、被災した人たちの、治りょうや心のケアをしている医りょうチームの活動を知りました。ぼくもあんなふうに困っている人たちの役に立ちたいと思いました。あんなかこくな環境で医りょうを続けるということは、すごいなと思うとともに、人を助けたいという強い気持ちを持ち続けることの大事さを感じさせられました。

そして、もう一つおどろいたことがあります。それは震災後もたくさんの新しい命がたん生していることです。よく考えれば当たり前のことなのでしょうが、現代的な医りょう設備を知っているぼくにとって、病院ではないし設や、テントでの新しい命のたん生は、生命のもつ強さという物を感じさせられることでした。

今、茨城県では病院が少なくなっているそうです。ぼくの住んでいる県北地区では、特に小児科や産婦人科が減少しているということです。被災地での新しい命のたん生と比べて考えると、子どもを育てる環境は悪くなっているという事実にぼくはむじゅんを感じました。安心して、出産、子育てができないと、ますます少子化が進んでしまうのではないでしょうか。そうなってしまうと、茨城県の未来はとても心配

なものになってしまいます。
　そうならないためにも茨城県の医りょうを充実させていかなければならないと思います。そのためにはまず、茨城県に医者を目指す人のための学校を増やして欲しいと思いました。地元で学び、地元のためにこうけんできるというのがぼくの理想だからです。近くに学校があれば、たくさん勉強もできるし、積極的にボランティア活動を行うこともできます。もし、あのような大きな災害が起きたときには、すぐに被災者の役に立てると思います。
　地域の活性化には、「安全、安心」が第一であると思います。そのためには医りょうの充実が欠かせません。今回の震災を経験して、ぼくは本当にその思いが強くなりました。十年後の茨城県を考えたとき、今よりも医りょうが充実して、今よりももっと安心してくらすことのできる県になっていることを願います。
　今回の大震災は、とてもこわい体験でしたがぼくは医者になるという夢をもつことができました。この夢が実現できるように努力していきたいと思います。そしてこの茨城県でみんなが安心してくらせる社会をつくり上げるように役に立つ大人になりたいと思います。

私の描いた将来の夢

北茨城市立常北中学校　一年　鈴木（すずき）　ひかり

　音楽ってすばらしい。私は心の底からそう思いました。
　今年の三月十一日、大地震が日本をおそいました。それによって、私の住んでいる北茨城市も大きな被害を受けました。実際、私の祖父母の家は津波によってなくなってしまいました。テレビをつけると、私は言葉を失いました。私の目に写ったのは、信じられない光景でした。町の建物は全てなくなり、残っているのはがれきの山。そこに家があったことさえも分からなくなるようなひどい光景でした。住んでいた人もたくさん亡くなり、昨日までの日常はうそだったかのように町は変わりはてていました。被災地の方々の心はとても傷つき、立ち直れない日々をすごしているのではないかと私はいつも思います。
　そんな中、私はニュース番組を見ました。そこには、被災地の方々をはげますために一生懸命がんばっている自衛隊の姿がありました。自衛隊の方々は、被災地で炊き出しやボランティア活動などをしていました。それを見て私は自衛隊の人達はいろいろな仕事をする事が分かりました。その中で、私が一番驚いたことは、音楽の演奏でした。今まで私は自衛隊と音楽は何も関係がないと思っていました。しかし、被災地で自衛隊は曲を演奏したり、歌を歌ったり、オリジナルのダンスをおどったりしていました。一人一人がみんなを笑顔にするためにがんばっている姿を見て、私は自衛隊の人達がとてもたくましく見えました。何事にも全力で取り組む自衛隊の姿を見て、被災地の方々も勇気づけられたのではないか、と感じました。
　実際、私の中学校にも県警の音楽隊の方々が来てくれました。その時は、「上を向いて歩こう」や「世界に一つだけの花」

など、たくさんの曲を演奏したり、歌ったりしてくれました。その時、私はとてもうれしく、楽しい気分になりました。そしてその日、私は県警の方々がとてもかっこ良く見えました。間近で見てから私は、被災地の方々もこんな気持ちだったのかな、とテレビを見た時のことを思い出しました。短い時間だったけど、演奏してくれる機会があまりなかったので、とても心に残る時間になりました。私はこの日の事を一生忘れないと思います。

私は、音楽は人と人との心をつなぐ大切な「魔法のかけ橋」だと思います。音楽は、世界共通です。たとえ言葉が分からなくても、音楽なら世界中の誰でも分かります。音楽で世界中の人とつながり合えるなんて、とてもすばらしい事だと思います。それに、たとえどんな事があったとしても、音楽は人の心に勇気と希望をあたえ続けてくれる不思議な力があると私は感じました。

だから私は、将来音楽関係の仕事につきたいと思います。私は今、吹奏楽部に所属しています。吹奏楽部は楽器を演奏するのはもちろん、明るく元気でとてもたのしい部活です。みんな、一生懸命練習しています。本番でひろうする時は少しきんちょうするけど、その後の感動は、とても大きいです。私は、この感動を一人でも多くの人に伝えたいです。だから、もっとたくさん努力して、将来困っている人や落ちこんでいる人がいたら、私の演奏で、はげましてあげたいです。そして、日本中がたくさんの笑顔であふれたらいいな、と思います。

未来へつなぐ茨城の伝統

潮来市立潮来第一中学校　一年　下河邊（しもこうべ）　大（ひろ）　貴（き）

僕は、生まれた時からこれまで、ずっとこの茨城県で育ってきました。自然がとにかく多くて、農業などをしている光景もたくさん見られます。こういった環境の中で育ってくると、自然に伝統というものが当たり前のものになっていると思います。当たり前でも「茨城」という事で他の場所と比べるとやっぱりこれは未来へつないでいくべき伝統だなと思うことが、大きく分けて三つあると思います。

一つ目は、農業の技術です。ここで僕が言っている「技術」とは、畑や田んぼの仕事を、植える準備をしたり、水かけをしたり、収穫したりという当たり前で大切な仕事をきちんと行っていくことだと思います。なぜこれが伝統なのかというと茨城は自然が多くて家族や親せきでも田んぼや畑を作っている人がたくさんいます。それでぼくはいつもおじいちゃんの畑で出来た野菜を食べていました。スーパーの野菜ももちろん食べますが、やっぱり家でおじいちゃんの作った野菜は、特別な味わいがありました。僕は伝統というものはそういうものだと思います。そしてなぜこれが未来へつなぐ茨城の伝統なのかというのは、十年後、二十年後、三十年後と、どれだけ時間がたっても特別な味わいをその時の茨城の人達に味わってほしいからです。そのために自分たちの世代でつなぐ伝統だと思います。

二つ目は、茨城の進んだ技術です。ここで僕が言う技術と

は、科学や宇宙に関わっているもので、これは茨城だけとは限らない事です。でも、僕の体験によって、茨城の伝統だという思いがとても強くあります。その体験とは、僕が家族と出かけたときのことです。ある科学についての科学センター、宇宙についての宇宙センターに行きました。科学や宇宙について、テレビなどでやっているところを見ると、見入ってしまったりと、科学や宇宙などのことが好きでした。そこでは勉強をしながら学んで楽しめて、とても良い経験をしました。茨城にこのようなことを出来ることがあって、専門のような所もありました。このような技術が茨城にあって、このようなことが他にある所も少ないから伝統になるということよりも、進んだ技術に茨城で触れることが出来たことの感動というものがあったから伝統になると思います。そしてなぜ、未来へつないでいきたい伝統なのかというと、この感動をこれから生まれてくる人達にも味わってほしいからです。これも、僕たちの世代がつなぐべき伝統だと思います。

三つ目は、茨城の人達の優しさです。これも僕の体験からいうことです。僕は毎日学校へ行くのに自転車で長い距離を走っています。その中でいつも地域の人達と何度もすれちがいます。そこで、いつも大きな声であいさつをすることを心がけています。すると何か作業していたりする人でも僕の方を向いて「おはよう」「こんにちは」など返事をしてくれて笑顔を見せてくれます。話しかけてくれたりする人もいて、そういうところに優しさを感じます。こういった人と人との関わりも僕は大切な伝統だと思います。このような伝統も今から大切にし、つないでいきたいです。

僕は、まだ未来へ伝統をつなぐ力になることがあまり出来ていません。ですが農業なら家族や親せきの手伝いをしたり、科学などに関してはできる限り科学などに触れたり、優しさならば日常生活から人に優しくすることを心がけていく。こういった小さな事からでもいずれ大きなものになればいいと思っています。このようなことで茨城の伝統を未来につなぐ力になれるようにしていきたいです。

十年後の茨城に向けて

ひたちなか市立田彦中学校　一年　平野（ひらの）　日奈子（ひなこ）

平成二十三年三月十一日、午後二時四十六分、東日本大震災により、茨城県も震度六の揺れに襲われました。また、北茨城市や高萩市、大洗町の沿岸部では、大津波による被害も相当なものでした。更に、福島第一原子力発電所の事故で、茨城県産のホウレン草や、お茶の葉等からセシウムが検出され、出荷停止になりました。出荷停止が解かれた今も売り上げはあまり良くないそうです。

それから、茨城の海も大きなダメージを受けています。毎年、栃木県等から来ていた観光客が、今年は、放射能の影響で、あまり来ていないそうです。私は、さみしい夏になってしまったなと思います。私の友達も、毎年夏休みには、必ず、海へ遊びに行っていたそうですが、今年は、

「ちょっと怖いな。行きたくないよ。お母さんも行かないって。」

と話していました。
　しかし、私の描く「十年後の茨城」は違います。今回の地震を「マイナス」ではなく、「プラス」に変えていくのです。そして、
「十年前は地震や、津波によって、こんなにたくさんの被害が出ました。しかし、今ではこんなにきれいで美しい茨城になっています。」
と、胸を張って言いたいのです。もちろん、地震の怖さ、津波の恐ろしさを全て消すのではなく、それらの恐怖を後世に伝えなければならない、と思います。そのために、地震や津波の被害の写真を集めた資料館があるといいのかなと思います。そういうものがあれば、地震を体験したことのない人々にも、地震や津波の恐怖が、十分に伝わるのではないでしょうか。
　地震や津波の恐怖について、宮城の方が、次のように語っていました。
「地震も津波も本当に怖かった。放射能も怖い。でも、その『怖い』だけを後に伝えていっていいのだろうか。この地震や津波から学んだ事もあるはずだ。それは、今回の地震や津波を経験した人しか知らない事。だからこの経験を伝えるのが僕らの義務。」
　この言葉を聞いたとき、私はハッとしました。今、自分達の事だけでも大変だと思うのに、次の世代の事まで考えていたからです。そう、今、子供の私達にも伝えられる事は、たくさんあるはずです。「いつも夏になると、たくさんの観光客で、にぎわっていた大洗の海が、今年はあまり人がいなくて、静かで、さみしかった事」、私は十年後には、人々が戻ってきてくれる、茨城の野菜もたくさん売れると、信じています。なぜかというと、十年後には私達が、大人になっているからです。そして私は、日本中の人に、いや世界中の人に、
「茨城の野菜は安全でおいしいです。茨城の海は安全できれいです。」
と、宣言したいです。どんどん呼びかけて、茨城に来る観光客が、以前のように、いや、それ以上に増えたらいいと思います。
　私の十年後の夢は、もう一つあります。それは、「茨城をもっときれい」にする事と、「茨城に住みたい」と思ってくれる人が、今より増える事です。茨城は、日本の首都である東京に近く、海や緑もたくさんあり、気候も温暖な所です。この事を、もっとアピールすれば、茨城を見直してくれる人が増えるはずだと信じています。
　私は、今回の大惨事になってしまった大地震から自然の恐ろしい面を知りました。災害に対して、普段から備えておかなくてはならないことを見直すとともに、自然と共生していくことを考えていかなくてはならないと思います。十年後までには、復興し、人々が安心して穏やかに生活できる茨城にしていきたいです。
　がんばれ日本
　がんばれ茨城

将来の夢

古河市立総和南中学校　一年　関（せき）　美（み）穂（ほ）

私は、未来の自分を頭の中で想像した。想像してみると、二人の私が出てきた。

一人の私は、バレエの先生になっていた。

私は、小学二年生の頃から、バレエを習い始めた。習い始めたきっかけは、プロのバレリーナを見てあの抜群のスタイルに憧れたからだ。その時は、「上手に踊りたい。」「バレエの先生になりたい。」など、考えていなかった。ただ、かわいいレオタードが着られたり、髪をおだんごにしてもらうのが楽しかった。

今は、中学一年生になって、習い始めた時よりも、クラスが二つも上がり、レッスンが厳しくなってきた。

六年生の時の発表会、先生は私にとても大事な役を任せてくれた。それは、主人公のお兄ちゃん役だ。聞いた時は、「トゥーシューズがはけないじゃん。」「かわいい衣装だって着られない。」と落ちこんでいたが、練習をするにつれて、分かったことがある。この役は、みんなの中心で踊り、とても目立つということだ。多くのお客さんの前で踊れることは、とても嬉しい。だが少し、恥ずかしいという気持ちや、間違えたらどうしようという不安な気持ちもあった。だけど、先生は、私がちゃんと踊れると信じてこの役を任せてくれたのだから、発表会を必ず成功させて、先生を笑顔にしようと決めた。

私は先生をとても尊敬している。バレエの先生になるためにはバレエ学校に通い、高度なテクニックや表現力を習得していかなければならない。さらに、技術だけではなく、体重などの身体管理ができることが必要とされる。こんなにたくさんの条件があるのに全てをこなした先生はやっぱりすごい。私は、先生のような、生徒みんなに信頼される存在になりたいと思った。

もう一人の私は、習字の先生になっていた。

私は、バレエを習い始める、三ケ月前頃に習字も習い始めていた。お母さんが私を無理やり習字教室へつれていった日を覚えている。だから、私が習字を習いたかった訳ではなく、お母さんが私に習字を習わせたかったのだ。体験で、硬筆をやり、先生に見てもらった時先生に言われた言葉が心に残っている。

「上手いねえ。」

お世辞だけど二年生の時の私はすごく嬉しかった。

私は、習字を何回もやめたくなったことがある。今は、その時なぜやめたくなったかはよく分からないが、この頃、私は習い事が四つもあった。休みがない毎日は、とてもつらく、お母さんにやつあたりなどして迷惑ばかりかけていた。でも私が習字を今まで続けてこられたのは、私の周りの人がいろいろ協力してくれたおかげだと思う。おくりむかえはもちろん、私の習字を見てほめてくれた。多くの人がこんなわがままな私に協力してくれて幸せものだと感じた。感謝の気持ちが心の底からあふれてきた。

私は習字を習い始めて、もう五年が経つ。先生の教えのも

と頑張ってきたかいがあった。
そして私には、小学校の頃から目標にしている先輩がいる。その人は五歳の頃から習字をやっていて、大人の人とくらべものにならないぐらい上手い。これからも先輩を目標にして、どんどん上手くなっていきたい。
将来の夢は、「習字の先生」と言うと地味に思われるかもしれないが、この夢が叶ったら、子供たちに、習字の良さ、楽しさを伝えて習字が大好きになってほしいと思う。
私の未来は、好きなことをたくさん見つけて人生を満きつしているだろう。だが何の職業についているかは分からない。バレエの先生になっていても習字の先生になっていても、みんなに夢をあたえられるようにがんばりたい。私は十年後、二十年後がとっても楽しみになってきた。

これからの茨城

那珂市立第一中学校　二年　塩野陽

僕は、最近気になっていることがあります。それは「茨城に住んでいながら茨城があまり好きではない人が増えてきた」ということです。茨城はたしかに、関東の他県に比べると田舎なので、都会にあこがれる若者は好きではないかもしれません。
残念なことに、知名度、観光地ランキングでは全国でも、最下位に限りなく近い県です。しかし茨城には、自慢できるところがたくさんあります。例として、気候が温暖であり、平地や海を生かした農業や漁業がさかんで、いつでも新鮮なものが食べられます。また、首都けんにも近く、茨城空港ができたことによって、交通網が発達したことがあげられます。
他にも、袋田の滝や大洗などの有名な海水浴場、さらに日本三大庭園の一つである偕楽園は、観光スポットとしても特に有名です。また、つくば研究学園都市は、日本でも最先端の研究をしていて、全国から注目されている都市です。
それに何といっても、人々が穏やかで、空気もきれいだし、緑もたくさんあることです。茨城の方言も、僕は気に入っています。それらの中でも、特に茨城っていいなと思えたできごとがありました。それは、東日本大震災でのことです。
暗やみの中、母と姉と僕で車の中で不安な思いで過ごしている時に、近所の方が僕たちを心配して様子をみにきてくれました。
「みんなで一緒にいればこわくないよ。」
と、ストーブのある暖かい物置で、父が帰ってくるまで一緒に過ごさせていただきました。余震が続く中、みんなで温かい物を食べ、毛布にくるまりながらいろいろな話をしました。そうしているうち、だんだんと余震に対する恐怖はうすれていきました。
その時改めて、近所とのかかわりの大切さを強く感じました。ストーブの暖かさよりもその優しい心づかいにとても気持ちが温かくなりました。
今、茨城では放射線による風評被害のため、海水浴客が激減しています。その風評被害を取り除くために、茨城の海・

土地・食べ物の全てが安全だということを、もっと他県へ向けてアピールしていくことが重要です。

しかし、それは大きすぎて僕一人の力ではどうすることもできません。僕は、この大震災を通して協力すること、助け合うことの大切さを学びました。今度は、僕たちが今困っている人たちを助ける番だと思います。今の自分にできることを常に考え、行動し、小さなことでもコツコツと続けていきたいと思います。

僕の好きな言葉に「one for all, all for one」というラグビーで生まれた有名な言葉があります。この言葉は、「一人はみんなのために、みんなは一人のために」という意味を持っています。一人の力ではどうにもならないことでもみんなの力を合わせれば、必ずできるようになると僕は思っています。みんなで支え合い、つらいことや楽しいことも、共にわかち合える関係を作りたいと思います。

そして、これからの茨城は、茨城のため、他県のために一人一人が協力していくという気持ちを、個人がもち続けて生活していくことが大切だと思います。

大好きな茨城が、今までよりもさらに繁栄していくことを願っています。

オレンジを着る日

日立市立駒王中学校　二年　橋野（はしの）　蓮（れん）

「お前、死ぬぞ」と怒鳴り、にらみつけるような目は、真剣さも伝わってきた。目の前で見ていた僕は、思わず「ゾクッ」と、背すじを伸ばした。この言葉を聞いて、将来の自分を深く考えた。

この日は職場体験だった。小さいころからずっとずっと、「レスキュー隊」になりたいと思っていた。炎の中に飛び込んでいく姿はまさに、命懸けだ。そして、あのオレンジをいつか着たいなと思った。

一日目の職場体験は終了し、二日目の職場体験だった。この日は、訓練が中心で、立っているだけで汗がふきだす中、訓練は始められた。重くて、ぶあつい、特殊な防護服を着て訓練をしている姿を見ていると、改めて厳しさを知った。自分ならば、こんな苦しい訓練をなげだして、レスキュー隊にはなれないだろうと思った。でも諦めたくはない。

ある、若いレスキュー隊の人がはしごをかついで、二階くらいの高さまでのばす訓練をしていた。その姿を、レスキュー隊員隊長がにらみつけるように見ていた。なにがいけなかったのかよく分からなかったが、隊長が、「そんなんでいいのかよ、お前、死ぬぞ」と怒鳴った。訓練の中で、「死ぬぞ」という言葉が出てくると思わなかった。

隊長の言葉は厳しかったが、優しさも感じた。レスキュー隊は命懸けである。危険にさらされた命を助けるのも第一だが、自分の命も守る事も第一だと思う。隊長は危険な場所で、自分の命も守れという意味も込めて言ったように思った。人の命、自分の命を守るためにも、普段からの訓練が大切なんだと思った。

今回の職場体験でますますレスキュー隊になりたいという

思いが強くなった。
　三月十一日に東日本をおそった大震災は、多くの人を苦しめた。テレビから目に飛び込んでくるのは、大津波によって残されたがれきだった。でもその中で、懸命に救助活動をしていた、オレンジの服はよく目立っていた。震災が起きてまもないのだが、休まず救助を続ける姿に、感動をした。救助された人には何と言われるだろう。僕は、きっと「ありがとう」だと思う。こんなに、すばらしいレスキュー隊になりたいと心の底から何かがあふれそうなほど思った。
　人の役に立つとは、どういう事だろう。「ありがとう」と言ってもらえる事、感謝されることだろうと思う。僕がレスキュー隊になろうと思った理由の一つとして、人の役に立って、感謝されるようなレスキュー隊になりたいと思った。危険にさらされている命なら、どんな命でも助けたいと思う。でも、そんな勇気を自分は今、出せない。これでは、救いたい命も救えない。
　小さいころに、大好きなじいちゃん、ばあちゃんと約束した。
「大きくなったらレスキュー隊になるんだ」と胸を張って、誓った。大きくなり、自分がオレンジを着ている姿をばあちゃんにも見せたかったが、四年前に、もう会えなくなった。でも、約束した事は忘れない。小さいころからずっと追い続けて来た夢は、ただひたすら真っすぐ進みたいと思う。そのためには、努力が必要だ。消防士からスタートし、厳しい訓練を受け、ようやくレスキュー隊になれる。必ず立ち止まる時があると思うが、自信と勇気で切り開いていきたい。
　危険にさらされている命を、助けられる自分が将来にいたら、その時は、勇気を出し、立派なレスキュー隊になっているだろう。そしてあの「オレンジ」を着て、多くの人の命を助け、自分の命も守りたいと思う。

都会より素晴らしい場所

稲敷市立東中学校　二年　根本（ねもと）　莉央（りお）

「都会は好きだけど田舎は嫌い。」
よくこう言う人がいます。確かに都会にはお店が沢山あるし、電車も多くて便利で魅力的です。
　でも私は、田舎でも茨城が好きです。その一番の理由は、あいさつと思いやりがあるからです。
　私の住んでいる地域では、行き交う人達は必ずといって良いほど、あいさつを交わします。あいさつは簡単だけれど、とても大切なものだと思います。
　そしてもう一つ、思いやりです。私が夏休みに犬の散歩に行った時、あまり交流の無かったお年寄りの方に、
「暑いね。熱中症に気をつけてね。」
と言われました。ただ一言だったけれど、私の心配をしてくれたことにとても心が温まりました。
　私は茨城のそういう所が本当に好きです。家族でなくても、顔見知りでなくても笑顔であいさつを交わし、人の心配も出来るという所が大好きです。ずっとそういう良さのある茨城であってほしいです。

そのために私は、思いやりの心をもち、どんなに小さなことでも、私に出来る精一杯のことをやろうと心がけています。

例えば、私がスーパーなどで次の人のためにドアをおさえておくことや、電車でお年寄りの方に席をゆずることで、茨城に笑顔が増えます。

私が、道に落ちてるゴミを拾ったり、公共の場を少しでも意識して使うことで、茨城がきれいになります。

このように、中学生の私にも出来ることはとても沢山あります。

私の将来の夢は、人の役に立てる仕事に就くことです。私を育ててくれた家族に、茨城に孝行したいからです。けれど、まだまだ先のことです。だから、今から出来ることは、きちんとやりたいです。

茨城を良い町にする人は、県知事などの頭の良い人、偉い人だと思いがちだけれど、私は、そういう特別な人ではなくて、県民の私達だと思います。

一人でも多くの人が、

（茨城を良い町にしたい。）

そう思い、行動すれば、自然にどんどん茨城は良い町へと変わっていくと思います。

逆に、

（茨城は悪い町でいい。）

と思う人が一人でも増えると、茨城を悪くしてしまうような行動が増え、どんどん茨城は悪い町へ変わってしまうと思います。

今の茨城には、

（良い町にしたい。）

と考え、行動する人と、

（悪い町でもいい。）

と考え、行動する人が居ると思います。

少なくとも、私は、良い町にするために行動の出来る人でありたいです。それも、口で言うだけでなく、考え、行動し、少しでも茨城を変えることが出来る人になりたいと思っています。

茨城には、他の都道府県から見て、魅力的な所が沢山あると思います。でも、それ以上に県民である私達にしか知らない、茨城の本当の魅力が沢山あります。その魅力を充分に生かし、都会に負けないくらい素晴らしい魅力を持つ田舎、茨城にしたいです。

「ありがとう」の大切さ

行方市立玉造中学校　二年　伊東梨夏

三月十一日に起きた大地震。私自身、初めての体験で、ただただ焦ることしかできませんでした。

あの大地震と大津波は、たくさんの人の命をうばい、大切な思い出を消し去っていきました。絶対に、もう二度と起こってほしくはないけれど、私は、大震災を通して、たくさんの事を学ぶことができました。

一つ目は、感謝の気持ちです。私の家は、自営業でとんか

つ屋を営んでいます。
震災直後、食料は、電気が通らないため冷蔵庫が使えないのでダメになってしまいます。
そこで、電気も水も止まってしまい、営業は不可能な状態でしたが、
「食料がダメになってしまう前に、安くしてみんなに食べてもらおう。」
ということになりました。
「水はどうするのか。」
「こんな状況で買ってくれる人はいるのか。」
などさまざなま問題があり、家族みんなで悩みました。
二日目には、お父さんの知り合いの人が、給水車を使って水をたくさん届けてくれました。あまり会ったこともない人だったけれど、
「ありがとうございます」
という感謝の気持ちでいっぱいになりました。
やっと、水もガスも使用可能になったので私の家では、お弁当のみで営業を再開しました。すると、当初心配していたことがウソのように、たくさんの人が買いに来てくれました。買いに来てくれた人も私たち家族も、お互いに、
「ありがとう」
を口にしていました。私が特に印象に残っているのは、買いに来てくれた近所のおばちゃんが、
「毎日、毎日、不安を持って生活しているけど、こうやって店がやっていると、安心する。ありがとう」
と言ってくれたことです。正直、店を再開するのが決まった時、私は自分の事で精一杯で、ただ売っていただけだったけれど、
「店を開くだけでこんなにも感謝してもらえるなんて……。」
と思い、私自身、すごく勇気と元気をもらいました。
二つ目は、世界中の人々の優しさです。震災翌日には、すでに世界の人々が募金や水や食料を提供してくださいました。それまで自分には遠い存在だった人でも、
「ありがとう」
という気持ちで一杯になりました。
私は、今回の震災を通して、「ありがとう」の大切さを学ぶことができたと思います。最初の頃は、不安と恐怖から、笑うことすらできませんでした。けれども、そんな中でも、自分が相手に「ありがとう」と言う時や、相手に「ありがとう」を言ってもらえた時は、自然と笑顔になることができました。
それに、普段私は、はずかしくて家族に対して、「ありがとう」を言わないけれど、素直に言うことができました。
これから、私は「ありがとう」の言葉を通して、たくさんの人に笑顔を届けたいです。

震災と茨城

常陸太田市立水府中学校　三年　斎藤　智亜季

「今日ね、今まで契約してくれていた会社から契約切られちゃったの。」

母が言っていました。母は茨城県の海産物を取り扱う会社に勤めています。震災があったあの日から、食品の放射性物質の基準値が定められ、それを越したものは出荷停止になるそうです。母の会社で取り扱っている海産物は、基準値を下回っているのに、放射性物質を心配して契約が切られたそうです。

このまま風評被害が続いていけば、茨城のおいしい海産物や農産物が全国の人々に味わってもらえなくなってしまいます。震災から一刻も早く立ち直ろうと、漁業や農業を再開しても、消費市場が減ってしまっては海産物や農産物が売れません。今回の震災で、茨城県は風評被害や津波被害を始めとした大打撃を受けました。

北茨城や大洗は地震の被害だけでなく、津波の被害もあり、壊滅的な被害を受けました。特に大洗では、他県で津波に流されてしまい命を落とした方の遺体が浜辺に打ち上げられているそうです。そのせいか、毎年海水浴をするためにたくさんの観光客が集まる大洗海岸も、今年は観光客数が半分以下に減ってしまいました。

身近なところにも震災の爪あとは残っています。私は吹奏楽部に所属していて、毎年夏に吹奏楽コンクールに出場します。今年は特に私たちにとって最後のコンクールだったので、昨年よりも、一昨年よりも、気合が入っていました。しかし、震災の影響で昨年まで使用していた大ホールが使えず、小さなホールで本番をむかえることになってしまったのです。ほかの中学校の演奏を聴けなかったり、表彰式に出席できなかったりと、自分たちの演奏以外にも悔いの残るコンクールとなってしまいました。

しかし、震災は被害や悲しみだけでなく、茨城県の人の繋がりを教えてくれました。停電が復旧した日、母は一本の電話をかけました。それは、茨城県の県北地域に住む母の知り合いへの電話でした。

「津波は大丈夫でしたか？　今度お米送りますから。ほかにも必要な物があったら遠慮なく言ってくださいね。」

電話をしながら母は泣いていました。悲しみではありません。生きていてくれてよかった、という嬉し涙です。

今回の震災で、全国の人は東北地方に目を向けています。大きな津波の被害を受けた原発の隣の県、茨城県はそこに含まれているのでしょうか。全国の目が東北地方に向いていても、県民全員が力を合わせて茨城県を元気にしていくことが大切だと思います。そして、茨城県が元気になったら、東北地方の復興の手助けをするのです。茨城県が先頭に立って、被災地を元気にすることができれば、全国にそれが広まって、茨城県に訪れる観光客や、茨城県の特産物の買い取り手が戻ってきてくれると思います。私は以前よりももっと、大洗の海岸がにぎやかになることを願っています。茨城県の人々の笑顔が増えることを願っています。茨城県の明るい未来のために、私はこれからいろいろなことに挑戦し、少しでも力になれるよう頑張っていきたいと思います。

もっと茨城に地域のつながりを

水戸市立赤塚中学校　三年　本田紗也

「はいっこれ、おすそわけね。」私の家の近くには、夕飯のおかずや、季節の果物、庭でとれた野菜を分けてくれるおばちゃんがいる。私は生まれも育ちも茨城県だが、小学校四年生の時、千葉県に引っこした。千葉ではマンション住まいで、お隣の人との交流は、会うとあいさつをするぐらいだった。千葉にこしてきてからも、母方の祖父の家が茨城町にあるということもあり、帰省をする際にはおばちゃんの家にも寄った。おばちゃんの家にいると、嫌なことも忘れさせてくれるし、ゆっくりと時間が流れていって、千葉に帰りたくなくなってしまうのだ。私が中二の時、茨城へ戻ってこれるチャンスがきた。父が広島へ単身赴任になり、私と母と妹の三人で戻ってくることになったのだ。最初は父がいなくて不安ばかりだったけれど、おばちゃんがいるので、とても心強かった。「困った時はお互い様。」おばちゃんに何度助けてもらっただろうか。三月十一日の地震の時も、すぐにおばちゃんが来てくれて「何かあったらすぐに言ってね。大変な時こそ、助け合いが大切だからね。」と言っておにぎりと金ぴらごぼうを持って来てくれた。余震が続き、不安な中で家族のように心配してくれるおばちゃんの存在にとてもありがたみを感じた。次の日も、おばちゃんは「うちの水が出るようになったから、必要になったらもらいにおいで。」と朝早くに言いに来てくれて、スーパーやコンビニで手に入ったものなどがあると、うちの家に寄って、少しのものでも分けてくれた。もし、まだ千葉でマンションに住んでいたらどうだっただろうか。きっと誰も助けてくれなかっただろうし、食べ物にも困っていただろう。

他にもあの地震を経験して感じたことがある。それは、私の周りには家族のように心配してくれる地域の人が他にもたくさんいることだ。「灯油、必要じゃないかい。」私の家の斜め前に住むおじさんが聞きに来た。地震があってからというものガソリンスタンドには連日、長蛇の列ができていた。寒い日が続く中、私の家からも灯油は消え、買うことができず困っていることを知っていたおじさんが、まだ薄暗い早朝から並んで、買ってきてくれたのであった。「本当にありがとうございます。」私が言うと、おじさんは何も言わずニコッとした。あの時のおじさんの笑顔は今でも忘れることができない。

未来の茨城には、おじさんやおばちゃんのような人はたくさんいるだろうか。都会のマンションのように自分は自分と言って、地域との付き合いがなくなってしまうさびしい茨城になってしまわないだろうか。私はこのままだと地域とのつながりもなく、孤独に生きる人が茨城にも増えてしまうと思う。そんな風にならないためにも私からお願いしたいことがある。知らない人にも「おはようございます。」とあいさつをしてほしい。この一言が私の大好きな茨城の明日を作っていくからだ。

小児科志望のナイチンゲール

大成女子高等学校　一年　植木千織

幼い頃、病院を恐れて泣き出してしまいそうになっていた自分に、満面の笑みを浮かべて声を掛けてくれた心優しく仕事もできる「白衣の天使」に憧れたことがある女の子が、きっと数多く存在することだろう。私も、その中の一人である。その当時、白衣を着た、天使のように優しいお姉さんに話し掛けられると、不思議なことに恐怖も一気に吹き飛び、溢れ出してしまいそうだった涙もあっという間に引っ込んでしまったことを、今でもよく覚えている。

看護師。女性看護師を白い看護服を身に着けた天使に見立て、「白衣の天使」と呼ぶこともある。しかし看護師という職業は、つい最近まで女性の職業だったため、「看護婦」と呼ばれていたが、現在は男性も就くことができる職業となったために、「看護婦」から「看護師」へと改称されたのである。そのため、女の子のもう一つの憧れでもあるナースキャップが廃止される一因にもなった。

そんな看護師の仕事といえば、医療系のテレビドラマなどでよく目にする患者への献身的な看病もそうだが、実はそれだけではない。例えば、心に深い傷を負った患者の話し相手になったり、小児病棟に入院する子ども達のお世話したりするのも仕事である。私は、看護師は責任感を伴うし、やりがいがある職業だと思っているが、ある意味、多種多彩な才能を要する職業であるとも思う。そのような職業を〝女性の職業〟として確立し、「看護婦」を世界中に送り出したのが、皆も知っているあの有名な、クリミアの天使、フローレンス・ナイチンゲールだった。

私が初めてナイチンゲールを知ったのは、三歳ぐらいの頃だった。母が毎晩寝る時に読み聞かせてくれた世界中の話を集めた本に、ナイチンゲールは登場した。その話の中のナイチンゲールは、クリミア戦争下の野戦病院で敵と味方の関係もなしに、負傷した兵士達に対して献身的な看病を行っていた。その他にも病院では、常に入院患者一人ひとりの容態を気にかけ、真夜中にも関わらず、ろうそくを片手に病室を歩き回った。当時の私は、そのナイチンゲールの姿が格好良く思えて仕方がなかった。後にナイチンゲールは国際赤十字社の設立に貢献し、世界的に有名な人物となったのだった。私は、ナイチンゲールに出会ってからというもの、彼女の慈愛に満ち溢れた心と、「看護師」という職業に対してますます憧れを抱いていったのである。

少し成長して、現在十五歳になった私は、将来は小児科の看護師になりたい、と思うようになった。理由は、小さい子ども達と遊ぶことが好きだということもあるが、自分が憧れていたもの全てになることができると思ったのだ。職業に小学校教諭や養護教諭があるが、小児科の看護師になれば、病気で学校に通うことができない子どもを集めて小学校教諭のように勉強を教えたり、子ども達の心のケアや怪我の手当てをすれば、養護教諭のようにだってなることができる。しかし私は、ただの小児科の看護師になろうとは思わなかった。特技が活かせる、人と違った小児科の看護師になろうと考え

たのだ。
私は中学時代吹奏楽部に所属し、打楽器を担当していた。現在も一般の楽団で吹奏楽を続けているのは、音楽も楽器も大好きだからである。決して上手くはないが、打楽器の中でも最も鍵盤楽器が得意なので、その特技を活かしながら仕事ができたら良いと思ったのだった。
このように、楽器などの特技を活かしてどのようなことをするのかというと、入院している子ども達を集めて楽器の演奏を聴いてもらうのだ。やはり、何もない病院で入院生活をしていると、つまらなくなってしまったり、精神的に辛くなってしまうこともあると思う。そこで、少しでも良いので、患者の心の安らぎになることがしたい。つまり、私は、患者の心を癒すことができる小児科の看護師になりたいのである。
私も社会人になって職に就いて初めて分かると思うが、きっと仕事をしていく上で、楽しいことや嬉しいことばかりではなく、泣きたくなるほど悲しいこともあるだろう。それでも、いつも笑顔を絶やすことなく、ナイチンゲールのような看護師になりたいという向上心を忘れずに、前向きに頑張っていくことが出来たら、と思う。そのためには、まず看護の勉強ができる学校に進学しなくてはならないので、今から勉強にも力を入れ、特技をもっと伸ばしていきたい。そして、これからの生活の中での様々な体験も大切だと思うので、充実した高校生活を送っていきたいと思う。そしていずれは、たくさんの子ども達から信頼される、小児科のナイチンゲール、いや、茨城のナイチンゲールになりたい。

もし私が茨城県知事だったら

県立茨城東高等学校　一年　田村（たむら）　明日香（あすか）

私がもし、茨城県知事だったら、前宮崎県知事の東国原知事をお手本にしたいと思います。なぜなら東国原知事はそれまであまりよく知られていなかった宮崎県について全国にアピールすることに成功したからです。東国原知事は芸能人だったことを最大限に活かし自らを「宮崎県の広告塔」としてテレビなどに出演し、宮崎県の魅力を発信し続けました。そのおかげで、宮崎県の特産物であるマンゴーや地鶏がたくさん売れました。また、県庁を一般の人にオープンにしたり、観光名所を紹介したり、プロ野球などのキャンプ地として招致したりして、観光客や宮崎県に来る人を増やすことに成功しました。
私たちが住む茨城県にも魅力がたくさんあります。例えば、観光地としては「西の富士、東の筑波」とその美しい姿から富士山とも対比される「筑波山」は古くは「万葉集」にも詠まれ、日本百名山、日本百景の一つに挙げられています。また、水戸黄門として知られる水戸藩主、徳川光圀ゆかりの城下町、水戸には茨城県の歴史に関する資料を展示、紹介している「茨城県立歴史館」、桜並木の遊歩道に囲まれた「千波湖」、日本三名園の一つとして知られる「偕楽園」などがあります。県北大子町には日本三名瀑の一つに数えられる「袋田の滝」があり、北茨城には岡倉天心の愛した景勝地五浦海岸があり、岩の上には天心が思索にふける為に自分で設計

した珍しい六角形の形をした「六角堂」などがあります。六角堂は今回の東日本大震災による津波で流されてしまいましたが、基金を募って復元される事が決まったそうです。また、那珂湊には「お魚市場」、日立には日本一の利用率を誇る人気の高い国民宿舎「鵜の岬」などもあります。実は私は今回、これらのことをインターネットで調べるまで、茨城県に、日本でも三本の指に入るほど誇れる場所がたくさんあるとは思いませんでした。

また茨城には霞ヶ浦や涸沼、利根川や那珂川などがあり、耕作面積も多く、出荷量が日本一という農作物も少なくありません。今回は東日本大震災で被災した所もありますが、本来は自然災害が少なく、非常に恵まれた豊かな県だと思います。スポーツも盛んで、県内にはサッカーやバスケットボールなどのプロチームもあります。鹿島アントラーズや水戸ホーリーホック、バスケットボールの茨城ロングホーンなどは地域と一体となって活動し、県内外に活躍の場を広げています。

その他にも、つくば市には宇宙航空研究開発機構「ＪＡＸＡ」をはじめ、多くの研究所があり、日本有数の科学都市です。

茨城県は全国的にも知名度が低く、「都道府県魅力度ランキング」などではここ数年ワースト３にランキングされています。でも、それは私と同じように全国の人達が茨城県について知らないからだと思います。私は東国原前知事のように芸能人ではないので、マスメディアを使ってのアピールはできませんが、私がもし、茨城県知事だったら、インターネットなどを使ってブログやツイッターなどで茨城県の魅力を全国に発信したいと思います。また、今でも取り組んでいるようですが「フィルムコミッション」での誘致を行い、観光に力を入れたいと思います。私が住んでいる石岡市では、関東三大祭りの一つでもある「常陸國総社宮例大祭」（石岡のお祭り）が九月十七日から開催されます。毎年、約四十万人の人出でにぎわいます。私は、お祭りに来てくれた人達が、今度は違う茨城県の名所にも行ってくれるといいな、と思います。

いろいろ調べてみてわかった事は、どんなに他の県に誇れる魅力ある県でも、人に伝えなければ宝の持ちぐされになってしまうということです。私は茨城県が大好きです。これからはたくさんの人に茨城県を好きになってもらえるよう努力していきたいです。

茨城の伝統工芸の未来

県立下妻第一高等学校　一年　滝澤　真衣

茨城の伝統工芸といえば、笠間焼や結城紬などを想像します。私は結城市に住んでいるので、結城紬という言葉を幼い頃からよく耳にしていました。小学校低学年の頃の町探険では、行き先の一つに結城紬を仕事にしているお宅があった事もあり、他の工芸品よりも身近に感じています。

しかし、最近は茨城の伝統工芸品ではない物の事ですが伝統を受け継ぐ人が減ってきているという事をテレビなどで見

る事が多くなったような気がします。茨城の事ではないといっても、気になってしまいます。「茨城の伝統工芸品って何十年、何百年先にはどうなっているんだろう。」「茨城には伝統を受け継ぐ人は、いるのだろうか。」と考えてしまいます。私は「伝統を受け継ごう。」とは思っていないので、心配するだけなんだ、とあきれる人もいるかもしれませんが、何も考えないで完全に無視するというのも、どことなく寂しい感じがします。技術がこれほどまで進んだ今でも、職人が作った物は美しくすばらしいと思います。やはり機械では人には勝てないのだなと実感します。

私は、このままでは伝統が受け継がれないというだけでなく、そのような伝統があったという事自体いつか忘れられてしまう可能性があると思います。技術を受け継ぐのは簡単ではないと思いますし、技術を受け継いだら機械がほうっておけば作ってくれるわけでもありません。確かに新しい物が生まれ、古い物がなくなっていくのは自然な事かもしれないですが、伝統はそんなに簡単になくしてしまっていい物ではないと思います。伝統を途絶えさせないためには、まず皆が興味を持つ事が大切だと思います。

理由は二つあり、一つ目は興味を持って知ろうと思う事により、伝統工芸品が身近に感じられるようになるのではないかと考えたからです。伝統工芸という言葉は難しいイメージがあり、親しみにくく、自分とは縁がない物と考えている人も少なくないと思います。しかし、調べてみると「自分の出身地の近くにこんな伝統工芸品があったんだ。」「この工芸品、実家にあったな。」など、身近にあると知る事により、親しみやすくなるのではないでしょうか。自分とは縁がないというのは決めつけだと思います。

二つ目は、知る事により、もっと知りたいと思う人がいると思ったからです。伝統工芸品について知れば知るほど、「これが無くなってしまうのはもったいないな。」と思ってくれる人が少なからずいるはずです。「伝統を受け継ぎたい。」という意欲を持つ人も出てくるのではないでしょうか。

そして、興味を持ってもらうためには、私は学校でその土地の伝統工芸品について調べたり、学んだりしたらどうかと思います。そうする事により、伝統工芸品を身近な物として考えてくれると思います。地域の人に伝統工芸品について聞いてみる事により、地域の結び付きも一層強まると思います。最近は地域の中での結び付きが弱まってきていると言われています。私が小学校の時にやった町探険のように地域の人と会話したり、色々な事を教えてもらったりする事が大切であり、必要なのではないでしょうか。そして、会話を通して、自分の住んでいる地域について関心を持っていく事も、大切な事ではないかと思います。

私は、このまま若い人の多くが伝統工芸に興味を持つ事なく、伝統の規模が小さくなっていく一方でいいのだろうかと思います。これからの日本、これからの茨城を作っていくのは私達です。過去受け継いできた物をなくしてしまうのも、しっかりと受け継いでいくのも私達次第だと思います。だからこそ、無関心である事が最もいけない事であると思います。もっと多くの事に関心を持っていく事が大切ではないかと私は考えています。

大好き茨城、僕の将来

県立土浦養護学校高等部　二年　清水裕平

僕は、大好きな茨城県土浦市に住んでいます。僕は、この茨城県で色々な人生を経験しました。勉強を覚えるための小学校、部活動や試験をやったりする中学校、そして、進路将来性を勉強する高等部の三つの学校を経験しました。小学校の時は、つくば市に住んでいました。親の事情で僕は土浦市に、引っ越しました。小学校は、友達も少しずつでき、だんだん増えてきました。僕の好きな教科は、図工でした。自分で好きな絵やテーマにだされた絵を描くのが好きでした。特に図工で物を作るのが好きでした。木材で木のロボットを作ったり、紙で人形を作ったりしました。教科の他にも宿泊学習で友達と一緒にねるのが楽しかったです。そして、あっという間に小学校を卒業しました。

中学校は教科や部活動がいっぱいありました。教科の中で僕は美術が好きでした。他の教科は、苦手で無理でしたが、美術は得意でした。部活動は、美術部に入りました。ここならば、僕と同じように絵を描くのが好きな人のあつまりだから安心してここに入りました。特にみんなで描いた絵を合体させて、一つの絵にするのがとても楽しかったです。

中学校の思い出は、体育祭です。暑い中、特に男子はジャージをきて人間ピラミッドを作りました。僕は、ピラミッドの下のだいをやっていました。だんだん人の上に人がのぼるので僕はつぶれそうでしたが、みんなと力を合わせて人間ピラミッドを完成しました。人間ピラミッドは、中学校のでんとうなのですごいと思いました。でも、楽しかった中学校も卒業してしまいました。

僕は、高校生になりました。僕が今かよっているところは、土浦養護学校で、小中高がある学校にかよっています。ここの学校は、部活動もあり実習もあります。部活動は、スポーツ部でいろいろな運動をするので楽しいです。高等部では、校内実習や集団実習を一年生のときにやりました。僕は二年生になって現場実習をやりました。特に現場実習は、一人で仕事場に行き、知らない人と一緒に仕事をします。僕が行ったところは、老人ホーム「かがやきの郷」に行って仕事をしました。最初は、分からないことがいっぱいあってすごく大変でした。質問したり、メモをとったりしてだんだんと分かるようになりました。特に利用者さんと職員さんがいっぱいいたので、名前を覚えることが大変でした。でも、きちんとメモをとって少しずつ覚えました。そして、現場実習が終わり僕は色々な仕事を経験して働く力をじょじょに身につけています。

今僕は、休みの日に母の仕事の手伝いで老人ホームに行っています。何のために行ってるかというと僕は介護の仕事をやりたいので、母の仕事場の老人ホーム「楓」に学校の休みの日に行ってお手伝いをしています。僕は今自分にあった仕事探しをしています。介護の練習をしています。おじいさんやおばあさんにやさしくしたいのです。まんがいち、介護の仕事をやることになったら、すぐにでもできるようにと考えているからです。

最後に僕が思ったことですが僕の夢がかなえられるようにがんばっているので茨城県も変わってほしいと思います。どう変わってほしいのかというと、いつまでも平和で住みやすい安全な茨城県であってほしいということです。

三月十一日金曜日午後二時四十六分に東日本大震災がありました。あの大震災で色々なことがいっぱいおこりとても大変でした。特に原発では、ほうしゃのうがいっぱいとびちってしまいました。そのせいでいくつかの食べ物が、食べられなくなりました。しかし人は食べなければ生きていけないのでとても心配です。節電にたいしては僕もつかっていないへやの電気を消したり、電気のコードをぬいています。ほうしゃのうがどうなるかよく分かりませんが、早くほうしゃのうが茨城からなくなってほしいです。もちろん茨城だけではなくひがいをうけた全てのほうしゃのうがなくなることを願っています。そしてみんなが安全に住める日本になってほしいと思ってます。

実り豊かな茨城の農業

県立茨城東高等学校　二年　萩谷（はぎや）　聡（さとし）

今、私達が生活している茨城県は他県に誇れるそして他県に負けないくらい実り豊かな農業を行い、またその農業に老若男女問わず幅広い年代の人が熱心に取り組んでいます。

事実、自分も家が農業をしていたこともあり幼い頃から畑に行く祖父母について行き、畑の土や草花に触れ、時には祖父母の手伝いで苺やトウモロコシ、ナス、キュウリ、トマトなどの作物の収穫や土の手入れをしました。「早く芽を出してほしい。」「大きく元気に育ってほしい。」そう思いながら夢中になって水をあげていた記憶が今も鮮明に残っています。

まだ幼かった自分はこの手伝いから学んだことが二つあります。まず、一つ目は生き物を育てる大切さです。自分は野菜や植物にも我々、動物と同じ様に命があると思っています。それはなぜか。植物だって我々と同じ様に成長するし、それぞれにしっかりとした個性があるからです。大きな葉をつける物や小さな葉をつける物。大きな花をつける物、小さな花をつける物。幼かった自分はその変化や違いを見るのが楽しみで仕方ありませんでした。しかし友達と遊ぶのに夢中になり、祖父と祖母が作ってくれた自分の畑の野菜の世話を何日間かサボってしまい、枯らしてしまいました。この体験から植物や野菜だって命はある、生半可な気持ちで世話をしたら可哀想だしいけないと祖母に教わり幼い自分は生き物を育てる大切さを学ぶ事ができました。

二つ目は、自分で育てた野菜をとれたてで食べた時のおいしさです。祖父母と一緒に育てたトマトを収穫して家に運び、水道で洗っている時に「食べてみな、おいしいよ。」と祖母に言われ当時欲張りだった自分は一番大きなトマトを選んで小さい手で頑張って洗いそして思いっきりかぶりつきました。そしたらそのトマトはとても甘くておいしかったことを覚えています。そのトマトを自分はとても笑顔でおいしそうに食べていたそうです。自分で苦労して育てた野菜は味つ

けや調味料が無くてもとてもおいしいんだと気付きました。
　自分は農業を通じてこの様な数々のすばらしい体験をすることができました。その体験から教科書などで学ぶ事ができない貴重で大切な事を学ぶ事ができました。農業には感謝しきれないくらいありがたいという気持ちで一杯です。テレビなどでも都会の人達が田舎に来て農業をしている姿がよく映ります。最近この茨城にも多くの人が来ていると聞き農業のすばらしさ茨城のすばらしさが色んな人達にわかってもらってきているんだと思うと自分としてはとても心が温かくなりとてもうれしい気持ちになりました。
　しかし最近、自分はとても悲しい気持ちにもなりました。テレビのニュースで放射能問題の影響で茨城の農業に大きな被害が出ていると知ったからです。地面が液状化して畑や田んぼが駄目になってしまった様子や、津波などの影響で水浸しになってしまった様子がテレビで流れていました。更に放射能の量の関係で育てた野菜を廃棄処分する所やまだ育っている途中の野菜を潰したりする様子もでていました。インタビューをされている農家の人も「大事に育ててきた野菜にこんな事をするのは悲しい。」と涙を浮かべながら話していました。他にも茨城産の野菜が全く売れなくなっている現状もやっていました。これを見て自分はなんだか茨城の農業が潰された気がしました。農業が、茨城の農業が消えてしまうかもしれないとまで自分は思いました。地震から五ヶ月たった今も前よりは現状はよくなりましたが、まだ地震前の様に戻ったわけではありません。放射能の影響などはまだありません。全国の人に、茨城の野菜を食べてもらうにはどうしたらよいのだろう。それは安全であることを何度も示し、安心感を持ってもらうしかないと考えました。例えば野菜をお店に並べる際放射能の測定結果を表示しておけば今、不安から、茨城県産の野菜を買い控えている人も、安心して手に取ることができるのではないでしょうか。目に見えない放射能の不安さえ取り除けば、野菜のおいしさは自然と分かってもらえると思います。茨城の豊かな土を、耕し肥やし、丹精こめて育てた野菜です。
　自分は大好きな、そして心から感謝している農業を、地元茨城の農業を信じ続けたいと思います。全国の人が茨城の野菜を食べて「おいしい。」と言ってくれる、茨城で農業をやりたいと言ってくれると信じています。

よりよい茨城のために

県立下妻第一高等学校　二年　齋藤（さいとう）　葵（あおい）

　私はこの夏、家族と茨城空港に行きました。中も外もきれいでした。人もたくさんいてにぎわっていましたし、いくつもお店がありました。ここまでは普通の立派な空港だと思い、空港見学を楽しんでいました。しかし、いざ飛行機を見ようと展望台へ行ったとき、悲しいものを目にしました。
　ガラスごしに見る飛行機。しかしそのガラスが特殊なものでした。ある方向が、どこの場所からも見えないように、ぼんやりと曇るガラスでした。その方向にあるのは、百里基地です。私はそれを聞いた時、裏切られたような寂しい気持ち

になりました。これも茨城の一面です。滑走路は自衛隊と併用しているのですから、近くに基地があることくらい、誰でも知っています。しかしそれをあからさまに見えないようにされました。残念ながら私は、茨城空港に満足しきることはできませんでした。

もしも私が茨城県知事になったら、茨城の全てを全ての人に受け入れてもらえる県にしたいです。人には誰にも得意不得意、好き嫌い、長所短所があります。初めは気になっていた短所も、友達になると気にならなくなります。いや、むしろその人の長所として見ることもあります。茨城県についても同様のことが言えるのではないでしょうか。茨城を大好きになっていただければ、今まで隠してきた短所も、一つの個性とすることができるのではないのでしょうか。隠しごとをする人を好きな人はいません。不信感を抱きつつうわべだけでつき合ってくれていた人も、ついには皆離れていってしまいます。茨城もそうなる前に、全ての人と信頼関係を築きあげることが大切だと思います。

茨城には、まだ不安要素が数多くあると思います。三月十一日の大地震で被災地となり、完全に復興しきれていない点もあるかもしれません。特に福島の原子力発電所の事故を受け、見えない恐怖と闘っている人々もいます。東海村の原子力発電所でも同じことが起こってしまうのではないかと安全性を疑う人も少なくないと思います。出荷を制限されている人々や風評被害を受けている人々も、いつまでこの状態が続くのか、どのようなサポートをしてもらえるのか心配なはずです。このような時に県と県民との間に信頼関係があれば、早期復興、そして確実な情報を早く受け取ることができるという安心があると思います。

今の一番の課題は、情報がどれだけ正確かをみんなに知ってもらうことだと思います。国会議員でさえ不正な取り引きをしているのに、茨城がやっていないはずがないと思うのが一般的だと思います。ただ結果をグラフにしたり、説明するだけでは、誰の信頼も得られないでしょう。しかも一朝一夕にできることではありません。しかし、これさえできれば、かけがえのない信頼関係が生まれます。この地道な行動こそが、将来の茨城のために必要不可欠と考えます。

茨城には長所もたくさんあります。風評被害は、裏を返せば農業がさかんだということです。また、港も多く、自然に恵まれた環境です。茨城で育つことができた私達は、茨城からの恩恵をからだいっぱいに受けることができました。つくば研究学園都市などでは、最先端なテクノロジーであふれています。ノーベル賞を受賞した教授までいらっしゃいますし、宇宙センターや国土地理院、防災研究所など、魅力的な施設ばかりです。

このような茨城の強みをどんどんアピールしていくことも、大切だと思います。数多くの茨城の良さを知っていただくことで、茨城はさらに良さを伸ばし、発展し、良さが増していくと思うからです。そしてもっと茨城を好きになっていただけます。またより多くの人に良さを知っていただいて……という風に、茨城がよりよくなると思います。

茨城県は、私達と似ているのではないかと思いました。まだ未熟で、できていないこともあるけれど、可能性に満ちて

いるのだと思います。もし私が茨城県知事になったら、茨城をもっと育て、茨城県に訪れた人々を一目ボレさせたいです。そして、全ての人々に茨城の全てを受け入れていただけるよう努力します。信頼関係をより強固にし、チームワーク抜群の県としていきたいです。まずは、私が茨城を知ることが愛される茨城をつくる第一歩だと思います。

大好きな町の今と未来

県立水戸第三高等学校　二年　磯崎夏実

私の大好きな町、大洗町は三月十一日の東日本大震災で四・九メートルに及ぶ大津波に襲われました。津波が襲った時間、私はまだ学校にいて実際に津波を見ていませんが、大洗に帰ってきて避難所である小学校の体育館で恐怖の一夜を過ごし、翌日の十二日津波の被害を見ました。本来ならあるはずのない場所に停まっている車・海岸沿いの道路には大量の流木やゴミや砂・折れ曲がった標識・陸地に上げられた漁船……今までの大洗の姿はどこにもありませんでした。

実際に、祖父の家が津波に襲われ、片付けの手伝いをしました。家の中はヘドロまみれで、堀りごたつは持ち上げられ、畳十四畳全て処分することになりました。家の中のヘドロを外に掻き出す作業で二日掛かり、塩水に浸りもう使えなくなった家具や畳を外に出す作業で一日、床や壁を綺麗に拭いたり消毒する作業で一日掛かりました。それと同時に、家の片付けなどもしていたので余震に怯えながらも、毎日休む暇もなく作業しました。

他にも私に出来ることはないかと考えた私は、町のボランティアに参加しました。配給の手伝い、道路の流木やゴミ拾い、公共施設の砂はきや掃除をしました。配給の手伝いをしていると、町中の小さい子からお年寄りまでが食べ物や飲み物を求めにやってきました。「ありがとう」や「頑張ろうね」など声を掛けてくれる人がいて、この町の人々の温かさを改めて知ることが出来ました。配給では、台湾のボランティア団体がカレーや麻婆豆腐など配給所で作ってくれて、温かいごはんを久しぶりに食べさせてくれたり、栃木からのボランティア団体はたくさんのペットボトル飲料水を届けてくれて、県外や国外の人々の優しさにも触れることが出来、心が温かくなりました。

この震災で、電気・水の大切さを痛感しました。寒ければ暖房を付けたり、暑ければ冷房を付ける・夜になれば電気を付ける・見たいテレビを見たり録画する、当たり前だと思っていたことが一瞬にして奪われ、寒い時は厚着をして耐え・夜は真暗な生活が続きました。トイレの水も飲み水も給水所まで取りに行き、節約しながら使う・お風呂は親戚の家の井戸水を沸かし震災から三日後に入れました。毎日入るのが当たり前だったお風呂も入れず、トイレに入って一ひねりすれば流れた水もたくさんの水を入れなければ流れず、私たちはいつも大量の水を苦労なしに使っているのだなと思いました。

大洗は今、たくさんの困難を乗り越え、震災前に戻りつつあります。毎年大洗の海水浴場には、大勢の海水浴観光客が

訪れます。砂浜では、ビーチバレーボール大会やビーチレスリング大会・海では海水浴はもちろん、ボディボードやサーフィンをして楽しむひとでにぎわっています。しかし、今年は震災の影響で海は例年にない寂しさを漂わせています。それと同時に、例年町中の道路は大渋滞していたにもかかわらず、今年はいつもと変わらない道路です。そんな大洗は私の好きな大洗ではないと私は考えます。

私の考える大洗は、夏の海水浴観光客でにぎわうことを中心に活気に溢れ、震災にも負けず、小さい子供からお年寄りが不都合なく生活できる町です。大洗といえば海・海といえば夏ですが、これから大洗は夏だけでなく一年中楽しむことの出来るような町にしていきたいです。今でも年間を通して磯前神社での菊祭りやマリンタワーでのフリーマーケットや盆踊りの夕べ、他にもあんこう祭りや大洗舞祭りなど行事はたくさんあります。それらの行事をもっと活気づけるとともに、さらに多くの観光客が訪れてくれるようにたくさんアピールしたいです。

観光客には大人はもちろん、小さい子供やお年寄りなどの幅広い年齢の方がいますが、どの観光客にも楽しんでもらえるようにユニバーサルデザインを配慮した町づくりが出来たらいいと思います。今でも、サンビーチ海水浴場ではユニバーサルビーチを設けていますが、町全体としてはまだまだ配慮されていないところがたくさんあります。公共施設はもちろん、普段通る道路など日常で何気なく使うところを、観光客にも自分たちにも使いやすく子供やお年寄りが不自由なく楽しめる町を、これから私たちの世代が作っていきたいと考えています。

私たちが繋ぐ明日

県立水戸第三高等学校　二年　小池加菜（こいけかな）

自分の日記を参考に、当時のことを思い返しながら書いていこうと思います。

今年の三月十一日、十四時五十分頃、マグニチュード七・四の大地震が茨城の地に襲いかかりました。東日本大震災です。そのころ私は一階の教室で古典の授業を受けていました。すると突然、縦揺れの地震が起こりました。最初は皆震度三程度ですぐおさまるだろうと思っていました。しかし、揺れは段々大きくなっていくばかりで、いよいよ本格的な揺れが来たので慌てて机の下に潜りました。机の上や中にあったものはみんな落ち机の脚を掴んでいても転がっていきそうなくらい身を揺すられ、逃げる時フラフラになる程大きな揺れでした。校庭に避難してからも何度も余震が起こり、家族は生きてるかな、大丈夫かなと不安でした。その時はいきなりすぎて何がどうなっているのかもこれからどうなるのかも全く想像がつきませんでした。

とりあえず皆体育館に移動し、帰宅できない生徒はそのまま寝泊まりすることになりました。私は弓道場からストーブを運んで、給油の手伝いをしました。三月といえどまだ寒く、夜は生徒・一般の方を問わずストーブの周りであたたまりました。真っ暗で、家族と離ればなれで不安だらけの、長

い夜でした。
翌朝、私は同じ市に住む友人のお父さんの車で家まで送っていただきました。帰宅して家族の無事がわかった時は、心底安心しました。家の中はあちこちに物が散乱していてガラスの破片も落ちていたので、一週間程靴を履いての生活が続きました。また、電気も水も無かったため夜は家族みんなで集まって蝋燭をつけてペットボトルの水を使いました。
それからはもう何日も水道が復旧しなかったものですから、地元の中学校で給水車を何時間も並んで待ったり、井戸水を貰いに行ったりと動きっぱなしでした。何日か経つと、みんな精神的に辛いのか気が立ってきたり、福島原発一号機や三号機の爆発などがあったりして言葉で表せないような気持ちが増していきました。友人にも会えない、ガソリンもなくてどこにも行くことができない、そんな心細さとの戦いでした。
長く感じる一日も、実感はなくても確実に進んでいて、倒れて傷ついていた墓石に手を合わせた日や少ない食料をみんなで分けて食べ「おいしいね」と笑い合った日がきちんと刻まれていっていました。
そして、四月十一日。震災から一か月経ちました。電車も無事開通し、今までの生活がまた戻ろうとしていました。この日は久しぶりの学校でした。始業式、通信簿、クラス替え、新しい春が、やって来ました。一年生のクラスが一か月前あのような形で終わってしまったのは悲しいし悔しいけど、いつまでもあのクラスは大好きだし色々な思い出は忘れたりしないから、新しいクラスで新しい一歩を踏み出そうと思いました。高校二年の春の始まりです。
東日本大震災。マグニチュード九のものすごく大きな地震。たくさんの方が、亡くなりました。明日があるはずだった人たちが、明日も明後日も生きるはずだった人たちが、一瞬にして、明日を失いました。地震に限らず自然災害というものは、いきなり現れて簡単に人の命を奪っていく、でも私たちの手ではどうすることもできない残酷なものです。
あるニュースで、こんな事があったと友人が教えてくれた話を紹介します。
津波に飲まれて亡くなった、配達業をしていた夫とその妻のお話です。津波で夫が行方不明になり、妻は毎日毎日夫を懸命に探し、ついに発見します。夫が提げていた配達カバンの中から妻はある物を見つけました。それは、指輪です。もう少し先にある二人の記念日に夫はそれを妻にプレゼントするつもりだったそうです。妻がずっと前から欲しがっていたものでした。それを渡せないまま、逝ってしまったのです。愛する者への、最後のプレゼント。「ありがとう」を直接言うことさえも、もうできないのです。
私はこの話を聞いてとても胸が痛くなりました。そして、簡単に「明日がある」なんて思ってはいけないんだ、と感じました。何気なく過ごしていた毎日は、すごく大事で幸せで、かけがえのないもの。毎日が「宝物」。そんな毎日を当たり前のように過ごしていたことに今更ながらびっくりしました。
人間の命の大切さはきっと、どんなに学んでも実感がわかないのだ。死と隣合わせになってみて初めて、生きてる幸せ

が分かるんだと思ったのです。
東日本大震災は、多くの尊い命の代わりにみんなに命の大切さを教えてくれたのだと思います。毎日を懸命に生きること、それが今生きている私たちの役目なのではないでしょうか。――貴重な体験でした。

がんばっぺ！ 茨城

県立水戸高等養護学校　二年　小田倉（おだくら）　夏（なつ）　海（み）

私は、この茨城に生まれ、多くの人達に支えられ、色々な人々に出会いました。今私には悩みがあり色々なカベにぶちあたりながらも日々、生活を送っています。
私は、この茨城で生まれ十七年という月日が経ち、ここまで歩いて来ました。その十七年間の中で茨城の魅力的な所や、美しい街並みを見て来ました。私は茨城の美しいと感じる所が、四つあります。
まず一つ目は、茨城の農産物の美味しさです。私の家庭でも、茨城の野菜を取り入れおいしく頂いています。だから、もっと多くの人に茨城のおいしい野菜などを食べてほしいと思っています。
二つ目は、茨城の人達が明るい所、そして思いやりがある所です。私が、電車に乗っているとき、おばあさんに席をゆずったり、話相手になったりしている方がいて、感動しました。私もこんな風に思いやりのある人になりたいと思いました。こういう人がもっと増えれば、高齢者が安心して生活できると思います。
三つ目は、あじさい祭があることです。私は個人的に見に行く事があります。でも残念ながら今年は見に行く事ができませんでした。来年は、見に行きたいと思っています。
四つ目は、何ごとにもあきらめない茨城です。今年、三月十一日に東日本大震災が、起こりました。私は、最初「もうだめだ」とあきらめていました。しかし、茨城や茨城の人達は、あきらめていませんでした。ニュースで、野菜を一生懸命販売している姿を見ました。私は、その人達の顔を見ました。私は思いました。何かを信じ、何かを思い前に進んでがんばっている。この人達は、何もあきらめないで前に進んでいる。私は、「何をしてるんだろう私は」と情けなくて仕方がありませんでした。
そして、今の私にできる事は何だろうか、と考えました。私は、茨城がまた元気になるように、学校生活を一生懸命頑張り、茨城の誇りになれるような大人になり、これからの茨城を支えられるような人になり、茨城を助けていきたい。「みんなは一人のために、一人はみんなのために」この言葉を合い言葉にして、これからを生きていきたい。私は、最近、悩んで、生きていることが苦しくなってしまいました。でも、振り返ってみると、そこには仲間がいて、家族もいてそして、私を支えてくれた人がいっぱいいました。
私は、私にできる事をしたい。もしまた、道に迷ったとしても、自分を信じ、仲間を信じこれからを生きていきたいです。そして、なによりも家族を一番に、大切に守っていきたいです。

私は、これからも、もっともっと茨城の事を知っていきたいと思います。そして、もっともっと好きになっていきたい。私のひいおじいちゃんは、北海道に住んでいます。おじいちゃんは「茨城の野菜はおいしいねぇ」と言ってくれます。色々な県の人達に、野菜やあじさい、そして茨城の伝統を見せてみてはどうでしょうか。これからの茨城のために、これから生まれてくる子供達のために。この素晴らしい茨城を残していきましょう。

私達の学校では地震が起こった時、避難所となっている近くの中学校に、避難しました。避難している時、不安でいっぱいでした。避難所にいた地域の人達は、不安ながらも励まし合いながらいました。私も、その周りの友達と楽しい話をして、不安と戦っていました。なかには、不安を押さえられず泣いていた友達もいました。

そして、私に迎えが来る連絡が入った時、家に帰れる安心感もあったのと同時に、友達と離れたくない気持ちがありました。自分にとって、友達は家族のようにあたたかくて、私を支えてくれる特別な存在だから、離れたくなかったのだと思います。そんな友達に会えて幸せだと思っています。

私が、茨城に伝えたい事は、一つになれば何事にも負けない、一つになれば、笑顔がいっぱいになるということです。だから、少しずつ一緒に歩いていきましょう。明日のために、未来のために。そして、私達の大好きな茨城のために。今、私達にできる事を。がんばっぺ茨城。

未来に輝け、私達の茨城

県立水戸高等養護学校　三年　山口（やまぐち）　あずさ

私が考えたタイトル「未来に輝け私達の茨城」には深い意味があります。東日本大震災というとても大きな地震と津波によって私達の茨城は崩れてしまいました。被災地にいる津波で家を無くした方々に未来へと輝いて欲しいという思いを込めました。

私は、茨城県が未来へと輝いて欲しいです。私達に出来ることをやり力を出し合えば震災の影響から出られるはずです。そのためにも私達は出来ることを精一杯やっていくことだと思います。私達がどんな気持ちで何を思っているのか、震災を受けてどんな気持ちになったか、改めて考えていくことも必要です。私は、今回のような大きな地震は初めてです。誰もが同じだと思います。震災を受けて私はとても恐かったです。震災が来た時は学校にいました。その時四者面談で今後の就職に向けての話をしたり、学校生活の話をしたりしていました。面談をやっている最中で震災が起こってしまいました。震災は、上から下からと色々な所から揺れて頭がグラッとなりました。落ち着いて先生の指示を良く聞いて避難しました。今は先生がいるけれど私達三年生は就職をし、大人の社会人になります。学校の先生は、一人一人の住む地域にはいません。一人一人が対応していくことが必要です。一人一人の力はすごいと思います。一人一人の力は違うけれど、みんな強い心を持っているので力を出し合うことが

出来ると思います。一人一人の考えを大切に、出来ることをやりましょう。私達の茨城を立ち直していきましょう。一人一人が出来ることをやっていけばもっと良くなると思います。

計画停電があったり、節電の声があったりしました。節電はまだ続いています。電力やエネルギーを復活させるためにも節電を続けましょう。今は暑くてエアコンを使うことがありますが、時間を決めて使っていきたいと思います。

私達に出来ることは何かを考えました。私達の学校で三年生が活動しました。私達が作ったのはプロジェクトＴＹです。プロジェクトＴＹでは、メッセージ入りの看板作り、そして料理をしました。それぞれ分担し力を合わせて真剣に取り組みました。私は、メッセージ入りの看板作りをしました。その時「どうして東日本大震災が起こってしまったのだろう」と考えました。メッセージはこの言葉が浮かびました。「全力前進つながろう日本！」勇気の出るこの言葉を一生忘れることはないと思います。震災が来たことも一生忘れません。一人一人がしっかりやることで何かが見えてくるはずです。私達は、やっと未来に近づけていけるのではないかと思います。私達の一つしかない、お金で変えらないこと、それは命です。そして、心。すごく大切なことです。希望を持ち諦めない心を持って生活していきましょう。被災地にいる方々、希望を持つだけではなく一人じゃないということを忘れないでください。辛くなったり、苦しくなったりしたら一人で抱えず周りを見つめてください。心がスッキリすると思います。私も辛くなったり、苦しくなったりしました。その時、私は青空を見つめていました。そしたら心が落ち着いてゼロからまたやり直そうと思いました。被災地にいる方々だけではなく皆様にお願いしたいと思います。

茨城、そして日本が明るく生活が出来るよう精一杯やりましょう。茨城の未来を見ていたい。これからの生活がどうなるか私の目で確かめていきたいです。私達は、今まで当たり前のようにご飯を食べたり、電気を付けて色々なことをしたりしてきました。当たり前だと思わないでください。ご飯が食べられるのは稲が出来て米になるまで時間がかかってやっと食べられるようになります。電気をつけて色々なことが出来るのは、電気屋さんが工場で作業をしてくれるからです。稲を作ってくれる人や電気屋さんに、感謝をしたいです。稲を作ってくれる人や電気屋さんだけではなく、国や県知事にも感謝したいです。私は、茨城県だけではなく日本中に感謝していきたいです。私達の茨城は、未来に輝いて欲しいので災害に強くなっていけたら良いなと思っています。笑顔でいられるようになってきたと私は思います。今色々なスポーツをやっています。野球やサッカーなどたくさんあります。一人一人のプレーが心を強くして笑顔を取り戻してくれたと思います。スポーツ選手にも感謝の気持ちでいっぱいです。これからもずっと応援しています。日本中の皆様頑張ってください。それから全国が未来に輝いて欲しいと願っています。

復興が出来るよう支援して、これからも茨城を愛し続けていきたいです。茨城県が大好きです。未来に輝け、私達の茨城。